

ここに人ありき  
柴田やす伝

船水清著



校歌

みそらに高き岩木の  
ふもとに広き津軽野辺  
高きをこ永久のみさをこにて  
ひろきをこつねの心とす



世はたまごまに渡れども  
かわらぬものは人の道  
あらぬこみちにはまじりて  
すゝみ道まん日に月に





学園の母

柴田やす伝

学校法人 柴田学園

本書は柴田学園に学ぶ方々に  
学園の生い立ちを自覚して頂  
くために再刊したものです。



昭和3年に文部大臣の認可を受けた当時の弘前和洋裁縫女学校



柴田 や す



昭和25年5月14日、東北女子短期大学開学式で式辞を読む柴田やす学長。この写真撮影後二分後に壇上で倒れた。





ここに人ありき

# 柴田やす伝

## 「柴田学園」の生みの母

お針娘十五人の裁縫塾から、徒手空拳女人の力で、短大など五校をもつ総合学園を経営、女子教育の振興発展に奮闘し、短大開学式の壇上で劇的な最期をとげた女流教育家

柴田やすは柴田学園の創立者であり、東北女子短期大学の初代学長であった。大正七年、私立女子裁縫実践学会という一私塾から出発して、本県女子実業教育の振興発展に文字通り一身を捧げ、戦後昭和二十五年、多年の夢であった東北女子短期大学が実現し、その開学式の晴れの壇上で式辞を朗読中忽然と急逝した。まったくその生涯のすべてを、女子教育ひとすじに捧げ尽くしたのである。

私学経営はいつの時代でも大変に困難な事業である。しかも女性の身で、徒手空拳その困難な事業に取り組み、不屈不撓の熱意に燃えて苦闘をつづけ、ついに一大学園を築き上げた努力は、まさに男子も及ばぬものである。柴田学園は現在本県はもちろん、東北でも有数の女子教育の殿堂として高く評価されているが、これを築き上げた柴田やすの精神は、その子今村敏理事長によって受け継がれ、いまも脈々として生かされている。柴田学園にとつて「学園の母」であるばかりではなく、じつに本県女子教育界における「女子教育の母」でもある。

教育者、とくに女性教育者といえ、なにか一定の枠にはまったタイプを連想しがちだが、柴田やすはそんなタイプの人ではなく、もっと幅広い視野をもった人間であった。それは彼女が前半生においてなめたさまざまな苦勞と、人生体験の豊富さに裏付けられているものとみられる。またその苦勞を乗り越えた力が、彼女に強固な信念を培わせたようだ。

柴田やすは明治十四年（一八八一）一月一日、父今村儀三郎、母ひさの長女として、東津軽郡青森大字安方町に生まれた。明治維新によってわが国は一大変革がおこなわれたが、新政府に対して不平不満を抱く士族らも多く、明治九年には神風連の乱、秋月の乱、萩の乱があり、同十年には西

郷隆盛らの西南の役が起こるなど、未だ世の中は多くの不安を蔵していた。しかし西南の役の終結によつて、これ以後土族の武力による反政府運動はあとを絶ち、世相も落ち着いてきた。

本県もこのころには廃藩置県（明治四年）後の混乱も一応おさまり、公選議員による第一回県会（同十二年三月）が開かれたり、学校や病院、銀行などもつぎつぎ開設されて、ようやく文明開化の曙を迎えていた。青森は明治四年に県庁がおかれてから、にわかには活況を呈し、また北海道開拓に伴つてこの港から渡道する移住者がふえたので、一段とにぎやかさを加えていた。当時やすの父儀三郎は安方町で酒造業を営んでいた。母のひさは南了益の娘である。南家は代々医を業とし、かたわら「元応丸」という家伝薬を製造販売していたが、そのころは医業をやめて薬種商となり、米町に店舗を開いていた。同業者中の老舗（しにせ）であった。了益には他に男の子はあるが娘はひさ一人であった。その娘ひさが一月元日に長女を生んだと聞くと南了益は非常に喜び、「世は浦安の安方に生（あ）れて久しく安けくもあれ」と祝いの歌を寄せ、「やす」と命名してくれたという。しかし、やすが生まれて百日を過ぎて間もないころ父儀三郎が友だちに誘われて海釣りに出掛け、乗っていた舟が転覆するという事故にあった。その時は幸いに助かったが、その後健康がすぐれず、九ヶ月後には亡くなった。そこでひさはまだ乳呑み児のやすを伴つて実家にかえつた。こうして幼いやすは母の実家に引き取られて七歳まで育てられた。父の顔も知らないやすであるが、南家の祖父の寵愛と、母の慈愛を一身に受けて、その幼児期を幸福に過ごしたのである。

やすの生家今村家について述べよう。今村家はもともと弘前の豪商である。明治維新までは弘前

本町一丁目に広大な店舗をかまえ、代々「大津屋」を屋号とし木綿正札、醤油醸造の二店を開いていた。同町内の金木屋（武田甚左衛門）とともに、繁栄を競った大商人で、藩の御用達であった。

今村家の由緒書によれば、初代今村九左衛門宗重は丹波国龜山（現京都府亀岡市）の住人で、豊臣家につかえ知行八千石を領していた。その後近江国大津（現滋賀県大津市）に移ったが、大阪夏の陣で豊臣家が滅亡したため、元和元年徳川方の追求の手を逃がれて、主従十二人で東北に下った。

その途中で家来六人が佐渡の金山へ、また三人が秋田野辺沢に留まったので、主従三人となって津軽に入った。このうち一人は青森に落ち着いて京野惣左衛門の先祖となり、もう一人は九左衛門とともに弘前に来て、丹波屋仁右衛門の先祖となったという。初代九左衛門には後継の男子がなく、町頭辻五郎兵衛の二男を養子に迎えて跡を継がせたが、初代は寛文五年に七十歳で亡くなった。この後代々九左衛門を襲名、商業を営んでいたが、九代重三郎のころに一時衰微した。

十代目万五郎（九左衛門宗庸）はこの衰微時代に生まれたが、文政七年、三十五歳の時家督をつぎ、独自の商才を発揮して産を築き、藩の御用達となった。当時は本町一丁目角で醤油屋を営んでいた。妻は岩館（現平賀町）六代目斎藤甚助の二女みんである。岩館斎藤家は領内きつての豪農で、また藩米移出の仕事を藩から許されていた家柄である。

この時代は十代信順、十一代順承の藩主時代で、八年間に及んだ天保の飢饉のため領民は困窮し、藩財政の窮乏が甚しかった。この飢饉のさい九左衛門は大阪に赴き、懇意にする稲川安右衛門、鴻池新十郎らの力をかりて、弘前本町に丸一という屋号で質屋を開き、難民の救済に当たった。当時

他の質屋は総潰れになって一軒もなかったという。また利息貸しということをも所々に始めさせ、絶えていた融通の途を開いた。

また天保十年には鳴海久兵衛（浅瀬石村の豪農）ら五人と米五千俵を献じ、安政四年には冥加金一万両のうち松山長左衛門（板屋野木村の豪商）と並んで筆頭の九百三十両を上納するなど、しばしば米金の御用に応じて藩財政の危機を救った。彼はまたその死に臨んで、貯粉六百俵の上納と、町中の極貧者への補助米百五十俵を分配するように遺言した。当時の人はその義侠に深く感謝したという。

彼は文才も豊かで、俳諧を三谷句仏に学び、俳号を東呉といい、また自謙と号していたが、隠居後は謙翁と改めた。晩年は箏と茶を楽しんで悠々自適し、嘉永二年七月十四日、六十歳で亡くなった。今村家中興の祖といわれる人である。

この人に四人の男の子があり、長男万五郎、二男仁三郎、三男和五郎、四男勇吉郎であるが、長男、二男ともに早死したので三男の和五郎が十一代目を相続、九左衛門を襲名した。本町一丁目四つ角で南北に二店を開き、木綿正札、醬油店を営んでいたが、この人の代には馬屋町の城外馬場で、馬廻り飼料一式を販売し御用達として免税され、藩士を顧客として繁盛した。今村家の菩提寺は新寺町の西福寺（浄土宗）であるが、このころ建物の腐朽が甚しかったので再建することになり、十一代九左衛門が大施主となって再建費の大部分を負担した。そして慶応二年に同寺院で盛大な落慶式が営まれた。しかし、それからまもなく廃藩によって事情が一変したことや、弟の勇吉郎が横浜

の外人との交易で失敗したことなどで財産を失い、明治四、五年ころ青森へ移転した。

やすの父儀三郎はこの十一代目九左衛門の三男である。長男は八五郎、二男は礼次郎で、そのほか女の姉妹もあった。青森に移つてからの儀三郎は、前述のように安方町で酒造業を営んでいたのである。

夫儀三郎と死別し、実家の南家へ娘のやすとともに引き取られていたひさは、その後今村家から籍を抜いたが、三十一歳の時に再婚話もちあがつた。相手は東郡荒川村の白鳥策太郎である。白鳥家は土地の旧家で庄屋をつとめ、白鳥一族の総本家である。策太郎は明治十五年に県会議員に初当選し、翌十六年に東津軽郡書記に任命されたのでいったん辞任したが、同十九年に県議に再選されていた。そのころ策太郎は妻に死別、男の子が一人あった。そこでやすの母ひさが後妻として迎えられたのである。

この時やすは七歳で、連れ子として白鳥家に引き取られ、荒川尋常小学校に入学した。この年の秋、郡場寛（のち京大名誉教授、弘前大学学長、植物学者、故人）が、青森の造道小学校から転校してきて、同級生となった。郡場寛に当時の思い出を記した文章があるので引用しよう。

「私は幼少のころには体が弱く、冬になるといつも足の凍傷になやまされ、すぐ近くの小学校（当時の青森栄町東端の造道小学校）へ通うのも大仕事であつた。それで七歳の秋、両親は冬外へ出なくてよまにあうようと、知り合いの荒川小学校の阿部順道先生の所に寄宿させ、冬の間ウサギの毛皮の足袋をはいて屋内通学をした。その当時やすさんはお母さんと一緒にちようど向かいの家に



明治39年4月、上京直前のころの柴田やすと長女梅（左）と二女敏

起こらずにすみ、私は翌年春自宅へ帰った」

また白鳥策太郎と再婚したひさは男女七人の子を生んだが、その長姉白鳥けい（弘前市中瓦ヶ町在住）さんはつぎのように語っている。

「私はやす姉より六つ年下ですが、姉はなかなか元気がよくきかないところがありました。それだけに勉強もよく出来ました。学校での勉強のほか、阿部順道先生の住宅によく行って、漢文を学んだと聞いております。姉のきつい性格は母から享けたと思います。私たちの母は、なかなか負けない気の強い人で、いわゆるしつかりものでした」

荒川小学校を卒業した明治二十四年の春、高等科に進むことになり、青森の新町小学校高等科に入学した。荒川の養家先から新町小学校まで六、七キロの道のりを毎日歩いて通学したのである。

住み、私の遊びに行くのはたいがいやすさんの所であった。遊びに行くことやすすさんもお母さんも、いつも親切に迎えられ、楽しく遊んだものである。やすさんは私よりただ一つ年上だが、体が頑丈で二つ三つ年上の姉さんのようであった。時には大勢のこどもと鬼ごっこをやった時、私をおんぶして活躍したのなども覚えていいる。こどもながら手まめに動く人であった。一冬の屋内通学で凍傷も



ところで、現在の青森市柳町・荒川間の道路は白鳥策太郎の努力によって建設されたものだ。策太郎は明治二十二年、市町村制施行により初代荒川村長に当選していたが、ちょうどそのころ青森監獄署の移転問題が起こっていた。当時監獄署は浦町の広田神社に隣接し、町の中心街にあったので、これを移転するよう町民の間から声があがっていた。そこで白鳥村長はこれを荒川に誘致するように運動した。それには柳町・荒川間の直線道路の開発を条件とする含みがあった。当時は荒川から青森に出るには道路らしいものがなくそのため住民は非常に苦労していたのである。

白鳥村長らのそうした意図を知らぬ当時の荒川村民や、大野村の斎藤某らは、監獄を誘致するとは何事かというので、猛烈に反対運動を起こし、監獄署移転に絶対反対を叫んだ。しかし、地域の開発はまず道路からという白鳥村長の意見が通り、ついに明治二十四年に移転が実現し、同時に現在の荒川道が開通した。この開通によって初めて住民はその恩恵を知り、のちにはその功をたたえたのである。この時には策太郎の別家白鳥慶一（当時県会議員、のち衆議院議員当選）も大いに協力した。

やすは、この養父たちの努力によって開通したばかりの道路を通して、青森の学校にかよったのである。そして四年後の明治二十七年三月、新町小学校高等科を優秀な成績で卒業した。この時十四歳であった。そこで母ひさは、「これからは一人前の娘になるためには、お針（裁縫）や家事をひととおり覚え、お嫁にゆく仕度をしなければならぬ」ということで、父方の伯父今村勝三郎家に家事手伝いを兼ねて養育方を頼んだ。この伯父はやすの父儀三郎の姉に婿養子に入った人で、油川

の三上重郎兵衛家の出で、当時安方町で米屋を営んで繁盛していた。

こうしてやすは十四歳までに四度も生活の場が変わったのである。しかし彼女は逆境に負けることなく、明るく利発な少女として育ち、学業は常に優等であった。とはいっても年端のゆかぬ少女のやすは、母恋しさのあまりしばしば荒川へ出かけた。そのころのことをのちにやすはつぎのように記している。

「私は生まれてまもなく父を失いましたので、母だけから教え育てられました。私が母に抱かれた幼時の第一印象は、母ほど優しく慈愛にみちたものはないと思つたことでした。しかし私が成長するに従つて、その愛は正しい愛で、決しておぼれる愛ではないと知りました。母は常に寛であるとともに正しからざることに對しては、飽くまで厳でありました。さらに私の深く感じたのは、その聡明さでありました。五十年の昔女子も政治を知らねばならぬといつて、よく八台所と政治Vを説かれました。主婦の領分である台所の経済生活と、一国の政治とを對比して、常にそのあり方を考えねばならぬと教えられたことは、今となってその先見の明に驚くばかりです。実に母は眞の慈愛を身をもつて教え、また女子も政治に関心を持ち、教養を高めねばならないという、感銘深い教訓を残してくれました」

今村の伯父の家で、やすは家事の手伝いのかたわら近所の裁縫の先生にお針仕事を習いにかよつた。ちようど日清戦争が勃発したころである。当時この家では二階に下宿人を置いていたが、その一人に三上直吉（弁護士、弘前市で開業、故人）もあつた。やすはこうした下宿人たちのお給

仕なども手伝ったということだ。

生後九カ月で父を失い、生母とは生活の場を異にして暮らさなければならぬという、いわば孤児のような立場の彼女としては、まわりすべてが義理の仲ばかりである。しかも今村家の跡を継ぐものとしての重荷がいつも心から離れないのだった。親戚の間には婿を迎えて今村家を継がせるべきだという意見もあったが、まるで天涯孤独のような立場で、しかも無財産無一物の娘に来る婿はないのである。そこで親戚のものたちも、よい縁があったら嫁にやった方がよかろうということになった。

その折りからやすに縁談がもちあがった。相手は青森市博労町の質屋柴田文太郎の弟、勇吉（明治八年八月二十九日生）である。勇吉は明治三十二年に分家し、大町で呉服店を開いていた。この



明治40年、東京府立家事科教員伝習所に通っていたころの柴田やす（左）

話がまとまって、同三十三年にやすは柴田家に嫁した。勇吉二十六歳、やす二十歳であった。そして翌年七月十五日に長女の梅（うめ）が生まれた。丸髷にカノコ絞りの赤い手柄をかけた若妻の彼女は店先きに出て甲斐々々しく立ち働いた。しかし夫の勇吉はなかなかの社交家で、それに義太夫などの趣味などあって、家に落ち着かず外出勝ちで、商売には熱心でなかった。そのために呉服屋

をやめて米屋をやったが、米屋の方も振るわなかった。この間に二女の敏が三十六年十一月二十四日に生まれた。ちようど日露の風雲急を告げるころである。年が明けて二月には日本がロシアに宣戦布告、日露戦争が始まった。

夫が商売に熱心でないことから、いつもやすの苦勞は絶えなかった。すでに二人のこどもまであるのだから、家に落ち着いて家業に精を出してくれば、と願うのだが、勇吉は何日も家に帰らないのだった。そうした苦勞を見兼ねて、白鳥の実母ひさがいろいろと慰め励ましてくれた。やすの運命を素直にうける性質と物事にいつまでもこだわらない性格、そしてことに当って善処する知恵とをみて、親戚の人たちは、「よく出来たおなごだな、柴田のオンチャマにはもったいない嫁コだ」と嘆息したほどであった。

さて、一方ひさの再婚先である白鳥家では、再婚後生まれた娘たちも成人し、そろそろ縁談話もちあがっていた。やすにとつては異父妹である。その一人の縁談の相手に秋元正規という人があった。秋元は西郡稲垣村出身で、慶応義塾卒業後アメリカに渡り、その当時北米アイダホで事業家として成功していた。そして明治三十九年の春、十年ぶりに帰朝し、白鳥家の娘と結婚した。しかし、秋元は新妻をそのままアメリカに連れて行くことはせず、当分の間東京の学校で英語などを勉強させようと考えた。それに秋元の妹も東京で一緒に勉強させる計画だったのである。

ちようどその時分、やすの境遇を知って心を痛めていたこの義妹は、やすも一緒に東京へ同行し、見物などさせて気晴しさせたらと秋元に話したので、秋元はその意見に賛成して一緒に上京するこ

とになった。こうして秋元夫妻とやすは三十九年六月一日に東京に出た。やす二十六歳の時である。しかし、上京したやすは秋元夫妻の好意で毎日見物に連れていってもらったものの、郷里に置いてきた二人のこどものことが気がかりだった。二人のこども、すなわち長女梅は六つ、敏は四つになったばかりであった。家庭の事情からこどもたちはやす夫婦とは別に他家に引きとられて育てられていたのであった。

はじめ秋元はそうしたやすの境遇をよく知らなかったが、事情を聞いてその立場に同情し、それならばこの機会に新たに打開の道を考えるべきだとすすめた。秋元は、アメリカにおける婦人の地位や、活動ぶりについて語り、日本の婦人といえどもこれからは、男女同権の自覚をもち、独立自活の道を拓くことが必要であることを説いた。やすは夫との結婚生活でなみなみならぬ苦勞の試練をなめ、このままでは将来二人のこどもを育ててゆくことも容易でないことを痛感していた。たとえ夫の手を離れても、妻は女として母として、独立の生計が出来ねばならないと考えていた時なので、秋元の話に深く感銘して発奮し、この際東京で勉強して、何か仕事を身につけようと決心した。郷里の幼いこどもたちのことは、まったく後ろ髪をひかれる思いであったが、一家の将来のためには、勇を鼓して踏み切るほかなかった。また自分は柴田家に嫁したので、今村の家が絶えることを憂い、前年の三十八年五月十八日に、二女敏を今村家の籍へ入籍しておいたのである。

こうしてやすは、秋元たちが借りた神田淡路町の家に同居して、新しい生活をはじめた。すなわち秋元の新妻は築地明石町にあった築地外国語学校の英語専科に、秋元の妹は跡見女学校に、そし

てやすは神田橋にあった東京府家事科教員伝習所に、それぞれ入学したのである。この家事科教員伝習所は修業期間が短いことと、その生徒の大半は大体やすぐらしいの年齢のものが多く、たいてい何かの事情で普通の教育を受ける機会をのがした人たちが占めていた。時間は午後からと夜間で、夏期学校もあった。また、秋元の妻が通っている築地外国語学校には洋裁部も設置されていたので、やすはここにも一週間に二回ずつ通って洋裁を習った。

こうして家事科伝習所を卒業したころには洋裁の方もほとんど習得したので、こんどは東京府の教員検定試験の勉強にとりかかった。話が前にもどるが、三人がそれぞれの学校に入学した当時、保証人が必要であったので、秋元はかつての恩師でもあった小山内大六を訪問して、そのことを依頼した。小山内大六（弘前市出身）は当時郷党の先輩陸羯南が経営する日本新聞社の記者として活躍していた。この小山内の甥に鎌田彦一（のち日本大学顧問、同大第三学園理事長、故人）があって、そのころ内務省の某局長の書生であった関係から、やすが在京中のことについて、つぎのような回想を書いている。（「柴田やす女史追悼録」から）

「私が、柴田先生に初めてお目にかかったのは、日露戦役の凱施の勝利に、全国民が酔っておった明治三十九年の夏で、先生は未だ若い二十六歳のころでした。このころは津軽地方から東京に遊学する者は、男子の学生でも、毎年中学校卒業生の約五分の一ぐらいで女学生にいたっては極めてまれでありました。私より五つ年上で、上京の際は、まったくの青森の町の姉様姿で、いつも私の母は、土族の娘とは違うねと批評したのですが、急にいわゆる昔の女学生に早変わりした訳であ

ります。すなわち当時流行の海老茶袴をはき、髪は前髪を高くゆい上げた当時大流行の二百三高地を結んで、学校へ出かけたものです。現在でも二十五、六歳の婦人が女学校を出たばかりの十八、九歳の若年ものたちと同席して勉強しようという篤学の方はまことにまれでしょう。しかもあの文化の程度の低い時代に、八、九歳も年下の妹らと一緒に大晩学せられたのです。こうして勉強されている間にも毎週一回ずつ小山内叔父より国漢文などの普通学の教授を受け、また永山源之丞先生が講習で上京するたびごとに、地理、歴史などの教授を受けられ、専念勉強せられたのであります」

ここに出てくる鎌田の母は、小山内大六の姉にあたっており、ちょうどそのころ小山内は妻に死別されたため、鎌田の母が上京して家事万端の世話をしていたのである。なお小山内はのちに満州に渡り、満洲日日新聞社の社長となった。また永山源之丞の名もあるが、この人はのちにやすが弘前に和洋裁縫女学校を開いてから、有力な協力者となるので、ふれておくことにする。

永山源之丞は慶応三年（一八六七）弘前百石町の津軽藩士の家に生まれ、明治十八年に青森師範を卒業して、小学校教員として勤め、その間に中学教員の免許状を取得、同三十四年から県立弘前高等女学校教諭となった。鎌田の記事にあるように小山内大六とは友人で、永山が講習などで上京すると小山内家に泊っていたのである。永山はのちに杉山燾之進、高山文堂とともに、和洋裁縫女学校の「三山先生」といわれ、やすの絶大な協力者となるわけだが、やすが東京で勉学中に小山内家ではじめて知遇を得たわけだ。

さて、やすは東京府管内の小学校裁縫科正教員の資格をとつてから、小山内大六のあつせんで板橋町（当時）の志村小学校に訓導として勤めることになった。そこで学校の近くにあるお寺に間借りして一人で暮らすようになった。いよいよ独立自活の足場を得たのである。やすが東京にいたのは、三十九年夏から四十二年夏までの約三年間であるが、この短い年月の間に寸暇を惜しんで勉強した。志村小学校に勤めるまでの間にも東京実業女学校技芸部に通っていた。いかに彼女が向学心に燃えていたか、そして一日も早く独立自活の道を拓くために発奮したかということがうかがわれよう。この涙ぐましい努力の陰には、郷里に残してきたこどもたちのことが、常にやすの心の支えになっていたのだ。

彼女の計画は、二人のこどもを自分の手もとに引き取つて、東京で働きながら育てることだった。志村小学校に勤務するようになってからのやすは、いよいよその計画の実現も間近くなつたものとして、毎日希望に充たされて元気で暮らしていた。そうした折りに勇吉の妹婿である佐野仙之助が突然上京してきた。佐野についてはあとで詳しくふれるが、彼は勇吉の依頼で、やすを青森に連れ帰るために訪れてきたのだ。佐野の話では、「勇吉は丹毒病にかかり生死のほどもわからない状態で、それでいまままで苦勞をかけた罪を詫びて死にたいといっているのです、自分が迎えに来たのだから、すぐ一緒に郷里に帰ってもらいたい」ということだった。そこで彼女はやむなくいったん帰郷して夫の看護にあたることにし、志村小学校には一時休暇届けを出して、佐野とともに青森に帰つた。四十二年七月のことである。



やすとしては勇吉の病気が回復すれば、こどもたちを連れて東京に戻るつもりだったが、勇吉は、「これからは病気が治ると真面目に働くから、一緒に暮らしてくれ」と、しきりに謝って頼むので、そこで青森にとどまることにし、東京の志村小学校は辞職した。そして県内の小学校裁縫科正教員の免許を受け、やがて自分の母校である青森の新町小学校に勤めた。こうして二人のこどもと久方ぶりに一緒に生活することができたが、四十三年四月には二女の敏も小学校に入学した。

しかし、敏が小学校に通い始めてまもない五月三日青森は未曾有の大火に見舞われ、全市街の三分の二を焼きつくすという災厄を受けた。この時に柴田家も丸焼けとなってしまったのである。勇吉の兄文太郎（本家）は質屋を営み、土蔵が四つもあったが全焼してしまった。この大火によって、青森は藩政時代の面影をいっさい失ったが、その被害は全焼住家五千二百余、倉庫、土蔵百五十と  
いう。

着のみ着のまままで焼け出されたやす一家は、また振り出しにもどったかたちで、最初からやり直しとなった。やすはもともと物欲には恬淡であったが、この大火での罹災後はさらに物欲にはこだわらないようになり、家具調度はもちろん衣服までも簡素を旨とするようになった。

このちやすは新町小学校から浦町小学校に転動したが、この苦難の間にもよく刻苦勉励し、文部省の検定に合格して中等学校家政科被服教員免許状を取得し、青森市公立女子実業補習学校（現青森市中央高校の前身）に勤めた。ここでも教員としてその成績が優良ということで、山内元八校長から感謝状を贈られた。この学校でのやすは、東京で学んだ新しい技術を生かして裁縫、家事、

手芸などを生徒に教え、その熱心な指導ぶりは同僚たちにも尊敬されたほどであった。

しかし、そんな彼女にまた一つ不幸が襲った。それは長女の梅が脊椎カリエスを病んだことだ。梅はそれまで元気に育ち、小学校での成績もすぐれていた。ところが幼い体を病魔におかされると、みるみる衰弱してしまった。やすは病院に入院させ、熱心に看護を続けたが、その甲斐もなく大正二年一月二十五日に亡くなった。梅が生まれてから、やす自身思いもかけないさまざまな苦悩を味わい、勉強のため上京中は母娘別々に離れて暮らすなど、悲しい状況がつづいた。それだけに梅の死は彼女の心をいたませた。わずか十三歳で薄幸のうちに生命の火を消したこの子のことを思うと、やすの胸は張りさけるようだった。

しかしその時分、やすはみごもっていた。そしてその年の九月二十六日に、三女的美穂子が生まれたのである。この子の誕生は、梅を失った心の傷をつぐなってはくれたが、乳呑み子を抱えての教師勤めは容易なことではなかった。それに明治四十三年の大火で家が焼けたのちのやす一家の生活は決してラクではなかった。このありさまをみて、やすに弘前にくることをすすめたのが夫勇吉の妹きぬであった。きぬは弘前でラムネの製造販売をした佐野仙之助に嫁していたのである。きぬはやすより二つ年上で、佐野家に縁づく前青森で一緒にお針を習いに通った時から友だちだった。そんな関係から明治三十四年にやすはきぬの兄勇吉へ、きぬは佐野家へ相前後して嫁したのだ。

ところで佐野仙之助は三重県出身で、郷里で米屋をやっていたが米相場場で失敗し、北海道に渡った。北海道からさらに青森へ移ってきて、酒の間屋を開いたがそのかたわらラムネの製造をはじめ

た。三重県の実家でラムネを製造していたので、青森でやってみたのである。これが大変な評判を呼び、大当たりだった。明治三十年には清涼飲料水の許可を受け、本県での元祖となった。そしてこの後まもなくきぬと結婚したわけだ。

佐野は、当時弘前に第八師団が設置されて好況を呈していることを聞くと、早速弘前に移り、本格的にラムネの製造販売に乗り出し、「朝日印」の商標で一躍有名になった。妻きぬは働きもので、大いに内助の功をあげていたのである。きぬが親身になってやす一家の弘前移住をすすめたので、やすもいよいよ自活の決意を固め、大正三年一月にそれまで勤めていた青森の女子実業補習学校を辞職した。そして一家は弘前に移り、取りあえず鍛冶町に借家をかりて住んだ。

やすは青森で生まれ育ったが、生家今村家はもともと弘前の出であるから、弘前には親戚もあり、また知人もあった。代官町の玉田酒屋や土手町の今村商店などが親戚である。また県立弘前高等学校には永山源之丞、杉山燾之進がおり、かつて青森の伯父の家に行ったところ知り合った三上直吉は弁護士を開業していた。

弘前にきてまもなく、やすは永山、杉山の二人を訪ねた。永山についてはさきに述べてあるから、杉山についてふれよう。

杉山燾之進の父は藩政末期の家老杉山竜江である。竜江は廃藩後は権大参事に選ばれ、青森県とあってからは中、北、南の各郡長を歴任して功労があった。氣宇広大にして国士の風格ある傑物だった。ところでやすの義父白鳥策太郎はこの竜江を尊敬し、その青年時代弘前にいて竜江に師事し

た。策太郎は農を嫌い政治家を志したのだ。竜江は惜しいことに明治二十八年、五十五歳で亡くなったが、策太郎は燾之進の代になっても親しくし、秋元に嫁した娘が弘高女在学中は杉山家に下宿させていたのである。したがってやすも杉山家をよく知っていた。

燾之進は元治元年（一八六四）竜江の長男として生まれた。東奥義塾を経て東京大学法学部に学んだのち明治三十年、東奥義塾に招かれて塾長となった。大正二年同塾の廃校まで勤めたが、弘前中学校に転じ、さらに弘高女に教鞭をとった。のちにやすが和洋裁縫女学校を開くと同時に教頭として補佐し、いわゆる「三山先生」の一人として昭和二十年、八十二歳で亡くなるまで協力を続けた。

やすが永山、杉山の二人を訪ねて、これからは弘前で生活してゆくつもりだが、今後いろいろと指導して欲しいと頼んだ。二人とも県立弘前高女の教諭でありお互いにやすの人柄や家庭の事情をよく知っていたので、われわれに出来ることなら大いに協力しましょうとやすを激励してくれた。そして、これからの生活の方針はどうするのかと聞いた。やすは、これまで自分が学んだ経験を生かして家事をはじめ和洋裁、手芸などの技術を、若い人たちに教えて身なたてようと考えていること、そして取り敢えず生計の道を得るために学校の先生になるつもりなので、どこか適当な学校に世話をしたいと依頼した。

これを聞いて二人の先生は、あなたほどの技術をもっているのに、今更また学校の先生をする必要はないから、すぐに私塾を開いた方がよい、と口を揃えてすすめた。当時弘前には県立弘前高等女学校と私立の弘前女学校の二つの女子中等教育施設があったが、これらの女学校を卒業しても、



大正敏女と柴田やす（左）と  
敏女と柴田やす（右）の  
撮影日青森で  
元年8月27日  
32歳、敏10歳

普通学科は別として、家事や裁縫のような、家庭に入ってから、すぐに役立つ素養においてはなお不十分であったから、そのためさらに裁縫塾にかよって花嫁修業をするものが多かった。二人の先生は、自分らは現に県立女学校で教えている身であるが、いつも女子にはもつと実学が必要だと痛感しており、世間でもそれを望んでいるが、あなたが私塾を開くことは、その要望にこたえるものであり、もつとも適任者であると激励した。

実際その当時市内の各所に昔ながらの裁縫を教えるいわゆる「仕事学校」があつて、町の娘たちを集めてにぎわつていた。しかしその多くは町の「仕事上手」とよばれるアネサマやオガサマが、内職がてら和裁の技術を教えるだけで、新しい知識や技術の持ち主ではなかった。一方、そのころは一般の生活水準もしいに向上しつつあつて、それにともない町方ばかりではなく、郡部の農村地帯でも娘を町の「仕事学校」に通わせる傾向が強くなつていた。

二人の先生の話の聞いているうちに、彼女の心は決まった。婦人生活と家庭、家庭と家事裁縫との必須関係による教育こそ、東京で勉強した当時のやすの理想であつた。しかも、それを実現するにはあくまでも自分が主体にならねばならない。学校の教師になつてしまえば、一つの部門だ

けになってしまふ。それでは自分の理想とする信条を教え込むことが出来ない。杉山、永山両先生が自分にすすめているのは、独立私塾の足場をつくれということだとわかつて、大いに感激したのである。

しかし、乳呑み子を背負い、幼い子の手をひいて、見知らぬ土地にきたばかりの彼女の懐中には、わずかばかりの退職金しかない。とにかく自活の道を得ることが先決問題であった。そこで鍛冶町の借家の軒下に「和洋裁縫手芸教授」の看板を下げた。生徒集めは佐野の義妹が奔走してくれて、十五人ほどになった。自分自身教材として賃仕事をとり、それを生活費に当てることにした。東京で学んだ新しい技術を、これらの娘たちに伝達し、娘たちもまた将来その技術によって身を立てることが出来るように……との抱負と願いをもって、まず最初の一步を踏み出したのである。この時やす三十四歳。彼女は小柄の方であるが、きりりと引き緊った体つきで、細面の美人であった。着物は質素なものでも、きちんとよく着こなし、いつも身だしなみを忘れなかった。

やすが弘前にきてまもない大正四年十月には、陸軍特別大演習がおこなわれて大正天皇が御来弘開かれたので、市民の評判は大変なものだったし、夏になると百石町の夜店がはじまって賑やかだった。

夜店は連合売出しをやり、商店では軒並みに万国旗や赤・青・黄の豆電球で飾りたて、街角では座頭の坊が津軽三味線でジョンカラ節など唄って人を集めた。夕涼みがてらに見物にゆく人が多く、

新聞は浅草の仲見世のような賑わいふりと書きたてた。

やすは忙しい賃仕事の合い間をみつけては、この夜店やネプタ見物などに敏や美穂子を連れていった。長女の梅を亡くしてからの彼女は、こどもたちと一緒に暮らすことの幸福をしみじみと感じて、出来るだけこどもたちを喜ばしてやるように努めたのである。「この子らだけは手元から離さず、自分の手でしっかり育てよう」と固く心にきめていた。

裁縫の仕事にはもともと自信があつたが、やすの仕事ぶりをみて、世間の人たちは非常に感心した。仕事が早い上に、その仕立てがじつにいていねいなのだ。その時分ある金持ちの若旦那で仕立て好みにむずかしい人がいた。どこへ出しても仕立てが気に入らないので出入りの呉服屋の番頭も手を上げてしまつていたが、やすのことを聞いてぜひにと頼んだ。そこでやすが縫つて納めると、若旦那は大変な気に入りで、当時チリメンの着物の縫賃七十銭であつたのを、この若旦那は祝儀として三円五十銭包んだという。

やすは何事も研究することが好きで、新しいところを発見すると、それを土台にして裁縫の急所を会得した。たとえば、留め口・たけくらべ・重ね着寸法・垂れものの裾合わせなど、一般にむずかしいといわれているものを、数字から割り出し、一定の法則によつて初心者でもわかるようにし、その要点要所を教え、これを自分で「柴田式裁縫」と名付けていた。

また普通の裁縫塾の先生たちは自分の秘訣というか奥儀のようなものは、なかなか教えたがらないのだがやすは絶対そんなことはなく、自分が苦心して研究したことのを全部を隠すことなく教えた。



大正6年、弘前市北川端町で裁縫塾を開いたころ、前列中央柴田やす、その右は三女美穂子

ただ教えるというより、その教え方は嚙んでふくめるようにいちいち手をとって「教え込む」方法をとったのである。こういうやり方であったから生徒たちの上達も早く、その評判は娘たちの親から親へと伝えられ、「柴田さんのところへやれば一年でチリメンものが縫えるようになるそうだ」というので生徒の数がしだいにふえていった。

そこで鍛冶町の家ではとても狭くなったため、六年には北川端町の二階建ての一軒家を借り受けて移った。ここではいままでの和洋裁縫手芸のほかに、生け花、茶の湯、習字も加えて教えた。生け花や茶の湯の師匠は町の各所にあつて、弟子をとって専門に教えていたが、それには謝礼や心付けなど何かと物入りなのである。それと習いにゆくものの多くは良家の子女で、着物などもなかなか美々しかったから、一般の家の娘たちはおいそれと習いにいけなかった。そんなこともあつて、



やすは裁縫を教えると同時に生け花や茶道も教え、教養やしつけの上からも花嫁修業にすぐ役立つように考えたのである。

習字も同様のねらいで、これは高山文堂に依頼し、週一回教えてもらった。小さな裁縫塾ではあったが、やすの抱負は大きく、一つずつではあるけれども、かねてから考えていたことを実行に移していった。また大正五年四月に、敏が県立弘前高女に入学したので、やすは非常に喜び、敏の月謝分といつて、毎晩帯一本ずつを縫ったということだ。

やすのたゆまぬ研究熱心と、生徒への指導上手は町の評判になり、習いにくる希望者がしだいにふえてきた。とても北川端町の借家では手狭で収容出来なくなったため、このさい思い切つて適当な売り家があれば、それを購入して移りたいと考えていたが、世話する人があつて手ごろな家が見つかった。その家は、上瓦ヶ町二十五番地の外崎鶴幼という狩野派の画家の家で、鶴幼が明治三十三年に亡くなったのち、その息子がこの屋敷内に写真館を建てて営業していたが、うまくゆかず手に渡っていたのであった。やすはこの家屋敷を当時五百円でもとめたのである。やすは家屋敷の登記に際しては、娘の今村敏の名儀とした。それはいままで、とかく不安定がちだった自分ら親たちの生活から、こどもの将来を守るために考えたのだ。こうして一線を画したことは、やすのいかにも確固とした人柄がうかがわれる。これが今日の柴田学園の基礎を築き上げた場所となつたのだ。そして大正七年七月十日、この時から私立女子裁縫実践学会として発足した。生徒は二十五人にふえ、ようやく私塾らしい体裁をととのえることが出来た。そこでやすは教科目も定め、修身、国

語、算数、和洋裁縫、手芸、家事にわけ、これを一人で担当したが、高山文堂には北川端町から引き続いて、書道の教授をしてもらった。

ここで高山文堂について述べておこう。文堂を紹介したのは杉山、永山の両先生であった。

高山文堂は名を静といい、嘉永二年（一八四九）弘前植田町に生まれた。藩校稽古館に入って漢書、算数を学び、慶応二年稽古館の書字典筆に拔擢され、名筆をもって謳われた。廃藩後は各小学校に習字を教え、また東奥義塾や弘前中学校の書道の囑託教師を勤めていた。文堂はこの時にやすの仕事を協力して以来、終始かわらず昭和十六年、九十二歳で亡くなるまで続け、杉山、永山とともに和洋裁縫女学校時代「三山先生」と呼ばれて尊敬されたのである。

さて七年九月には弘前・五所川原間に陸奥鉄道（いまの五能線になる前）が開通して交通が便利になったので、藤崎、板柳方面からも汽車で通学する生徒がふえた。また当時、女子の修学熱が高まってきたことから八月には弘前市立女子実業補習学校も開校された。普通学科よりも実際的な家事や裁縫に重点をおく女学校が一般から要望されてきたのである。

こういう風潮の反映と、「柴田式裁縫」の評判が高くなって、志望者がさらにふえた。そこで顧問格の高山、杉山、永山の三先生に相談したところ、この機会に将来正式な学校として認可を受けるためにも、いまから学校としての体制づくりをした方がよいという意見で、大正九年四月から私立女子裁縫実践学会を、私立柴田和洋裁縫学校と改め、生徒の定員を五十人に定めた。速成科六ヵ月、研究科一ヵ年である。そして自ら校長となった。

いよいよ開校式の当日、ささやかな玄関口に生徒の手になる杉の葉のアーチが立てられ、紅白の幕がめぐらされた。この日やすは早朝に起きて、十坪ばかりある前庭をキレイに掃ききよめた。すると庭の片隅にいままで気がつかなかったが、何かの木の苗が三寸ほど伸びて、若芽をつけているのを見つけた。それはいかにも新鮮であり可憐であった。いつどうして生えたのか、まったくわからなかったが、開校式を迎える朝に、これを見つけたことが心を打った。

やすは思わず「お前と私は今日から一緒に出発しよう。お前も私と一緒に伸びておくれ。私もがんばるから、お前も枯れたりしないでどんどん伸びておくれ……」と、心の中で話しかけ、ほうきで庭土を寄せていたわった。あとでわかったことだが、この木はニワウルシであった。

やすには、この晴れの開校式に着る紋付がなかったので、縞の袴に着けて式辞を読んだ。しかし心は晴れ晴れと明るく希望に燃えていた。弘前に移ってきて足掛け六年目、三度居を移して、ようやくここまでこぎつけたのである。

すでにやすの覚悟は決まっていた。自分の一生を賭けて、この学校と運命をともにするハラだったのだ。前年四月に今村家を絶家として届け出ていたし、またこの年の一月にはそれまで青森市大字大町四十一番地にあった戸籍を、弘前市上瓦ヶ町二十五番地に正式に転籍していたのである。

上瓦ヶ町に学校を開いた四月には、やすにとつてもう一つの喜びが重なった。それは娘の敏が弘前高女を三月に卒業し、東京の渡辺女学校高等師範科に入学したことだった。この学校はのちの東京女子専門学校の前身であるが、当時地方からこの学校に合格することはなかなかむずかしいのだ

った。敏は母の意思を継いで同校の裁縫手芸科を専攻したのである。

しかし敏は、学校の創設経営のことで日夜忙しく、また家計に余裕のない母のことを思うと、自分だけが東京の学校に進むことが気になって、合格はしたものの幾度かちゅうちよせざるを得なかった。そんな娘の心遣いをみて、やすは「お前が学校を卒業するまでは、お母さんは好きなお芝居を観ないで頑張るから、心配しないで十分に勉強に励んでくれ」と励ました。

やすはほとんど物見遊山などに行く暇もなければ、そんなことに金を使うこともしなかったが、歌舞伎が好きで、これだけは弘前座にかかると観にいった。弘前座はもと柁木座といつて元寺町にあったが、大正六年に出火して全焼し、その後同八年八月に再建されて名称を変えたのである。この時のこけらおとしには松本幸四郎一行の名題歌舞伎がかかり、大変な評判を呼んだ。芝居好きのやすは柁木座時代から、芝居見物を唯一の楽しみにしていたのだ。その『芝居断ち』までしても娘を進学させようとする母の心に敏は泣いて感謝した。

そればかりではなく、帯一本五十銭、錦紗の袴一枚七十銭という夜なべ仕事をして、月五十円の学費や生活費を送りつづけた。敏もまた母のその苦勞を思い、在学中一度も映画館などには足を踏み入れることをしなかった。またやすの『芝居断ち』はそれ以来とうとう亡くなるまで三十年間続いてしまったという。

一方、やすは敏が東京に行つてからは、小学校に入ったばかりの妹の美穂子を抱えて、どうしても人手が足りないので、荒川の白鳥の母に手伝いに来てもらつていたが、やがて白鳥一家はあげて

弘前に移ることになった。

白鳥策太郎は明治三十六年に三度目の県会議員に当選し、同四十一年には村民に推されて二度目の荒川村長に選ばれ、同四十五年まで勤めていたが、その後は老齢のため公職から離れて悠々自適していた。そのころには長男が荒川郵便局を経営していたので、荒川の家は長男にまかせ、弘前に移る決心をしたのだった。青年時代弘前で暮らしたことのある策太郎としては、晩年を過ごすには弘前の方がよいと考えたし、母のひさも娘やすと同じ土地に住むことを望んだのだ。

さて、当時の校舎は、写真館の建物を改造した木造洋館二階建てで、階下は七室にわかれ、入り口に近い三室は生徒控室、寄宿生徒の部屋にあて、奥の四室は家族の部屋、炊事場などに使用、階上の三室を教室にあてていた。この三室はそれぞれ八畳間で、畳敷きの上に裁縫板が並べられ、生徒は一つの裁縫板に四人向かい合わせに坐わるのだった。

校門の左右には黒板塀がつらなり、この門を入れて右側に校舎があつたが、門内にはサワラの木が茂っていた。校長であるやすはこの建物のなかに一緒に住んでいたのである。

やすはかねてから、各種学校令による女子実業教育の学校として、正式に設立認可を得ようと県に申請していた。そのため県庁の学務課にしばしば足を運んだが、当時学務課に石戸谷五郎（のち県視学官）という人がいて、やすがあまりに熱心なので、学校設立の認可について新身になつてあつせんした。また地方教育界の先覚者であり、功労者として深く尊敬されていた杉山、永山、高山の「三山先生」がやすの事業を心から支援していることが大きな力であつた。ことに杉山は労をい

とわず、自ら県への交渉を引き受けて、その認可実現を早めたのであった。

大正十二年二月十日、ついに待望の設立認可が決まった。各種学校の公認を得て、私立弘前和洋裁縫学校として出発したのである。生徒定数は予科四十名（六カ月間）、本科四十名（二年六カ月間）、研究科二十名（一ヶ年間）の計百名とし、教科目は予科は修身、国語、裁縫、作法、本科は以上のほか生け花、茶の湯、研究科は生け花、茶の湯、作法で、その他各科とも手芸、刺しゅう、編物、袋ものを教えた。資格は予科は高卒の労力あるもの、本科は予科修了者、研究科は高女卒、または同等学力あるものとし、授業料は予科一カ月一円、本科一円五十銭、研究科二円であった。

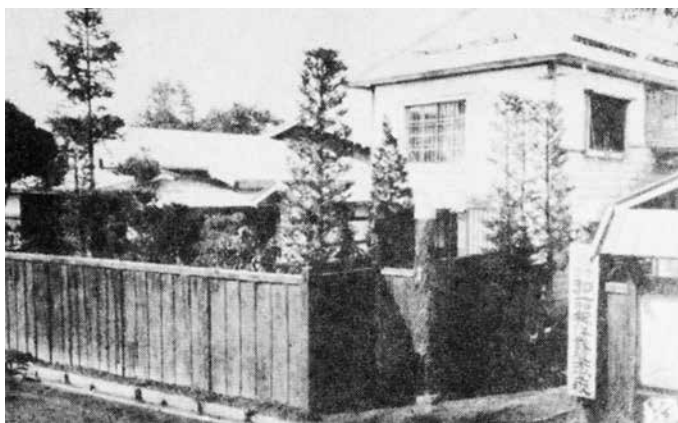
裁縫、生け花、茶道、作法は校長が教えたが、この時から修身、国語は杉山燾之進が教えた。また書道は高山文堂が担当、ほかに菊池ヤエ子がやすの助手として裁縫を教えることになった。

生徒はいままでのご二倍にふえたが、「和洋が公認になった」と聞くと志望者が殺到して、すぐに定員いっぱいになった。そこで四月八日に入学式をおこない、また六月二十六日には開校式を挙行した。

開校式には石郷岡文吉弘前市長も出席して祝辞を読み、やすの努力を讃え、学校の発展を祝ってくれた。石郷岡市長は私学の振興に理解をもち、またやすが女子教育のため献身的な努力をそそいでいることに、大いに感銘していたのである。

のちにやすは開校当時の状況について、つぎのように記している。

「当時社会の文運はようやく進み、国家の教育も日ましに隆昌におもむきまして、国民ひとしく



大正12年、認可になった和洋裁縫女学校の最初の校舎

文教の恵沢に浴することのできる時代でありましたが、ただその機関が、十分社会の要望に添うことができなかったうらみがあつたのであります。殊に女子の使命である家政教育方面においては、いっそうその感を深くしたのであります。当時は家事裁縫と申しまして、非常に軽視され、勤労をいやしめ、知的方面のみ重要視された時代でありました。しかるに女子はどうしてもその實際生活に即した。実技と勤労が必要でありますのでここに「教育即生活」の目標を定め、私の母校である東京府家事科教員伝習所の学則を参照し、地方の實情に鑑み、女子に必須なる裁縫家事を主とし、育児衛生に重点を置くところの各種学校として大正十二年二月十日、県の認可を得、百名の定員をもって設立したのです」

また開校当時のありさまについて、卒業生たちはつぎのように回顧している。

「私は大正十一年、弘前和洋裁縫女学校として発足する直前の和洋裁縫学会時代に、柴田先生に直接手をとってお教えをいただきました。ちょうど私たちが六カ月の速成科、一カ年の研究科の課程をおえ、卒業証書をいただいた大正十二年三月五日が、県から学校認可についての下検分のあつた日でした。僅か数日後の三月九日には、正式に認可になったのですから、恐らくこの時は認可が確定的になっていたのだと思います。六月二十六日に開校式が挙行されましたが、私はその後まもなく学校へお手伝いさせていただきました。当時女の先生は、校長先生と菊池先生、私と三人だけでした。男の先生は杉山先生だけで、高山先生はお習字の授業の時だけおいで下さるのです。でもすぐ卒業生の工藤みちさんがこられ、また弘前高女を退職なされた永山先生もおいで下さいまして、校長先生のよくおっしゃる高山、杉山、永山の三先生がお揃いになられたのです。私は先生とは名ばかりで、かえって校長先生を煩わすことのみが多くて、いつもすまないことに存じておりましたが、それにもかかわらず、どのような失敗にもお叱りになることはなく、いつも温かいお心でお諭し下さるのでした。また信仰心があつく、ご記憶のよいことや、研究心に富んでいられ、物を生かしてお使いになるなど、常人のなし得ないことでした」(黒滝セツ、のち同窓会副会長)

「今でもはつきり目に浮びますが、木造洋館二階建ての教室に約三十名ぐらいの二十歳前後の娘さんたちが、お裁縫の最中、上気した柴田先生が何か紙を二、三枚もって登っていらつしやいまして、皆さん喜んで下さい。学校としての認可を公布されたのです」と聞かされた時、全員総立ちと



なつて、万歳万歳、お目出度うと喜び合いました。翌日門には木の香も新しく墨痕あざやかに、公認弘前和洋裁縫女学校と書かれた看板がかけられました。それからの毎日毎日楽しいものでした。しかし先生の胸中は創業のためのあれこれ、授業もあり、大変なことと思ひました。先生はいつも綿服（その当時ニコニコ紺、一反一円五十銭位）を召され、袴は茶色のメリンスでした。教え方のきびしいのに私は泣かされたことが一つあります。和服のキメドコロである袴の出来上がったのは、自分はとてもうまく縫えたと自信たっぷりでお見せしたところ、いきなり「まいね、まいね、駄目、ハサミ」といわれ、ほどいてしまったのです。そして噛んでふくめるように、本当に手を取って縫い方を教えて、先生いわく「私はよその先生のようにカナメ（奥儀）は自然に習得するような教え方はしない。おしげなく公開して、早く一人前にしてあげたいのです」。今度こそと、くやし涙を呑み込み縫い上げ、もしそれも駄目なら、学校なんかやめてしまおうとの決意で、見ていただきましたら「上出来、甲の上ですよ」そして研究科のみなさんに「手にとつてよく見なさい」とほめちぎった時は先生の弟子（でし）思ひの有難さに感謝でいっぱいでした。この一事はあとで私が東京の師範で教育学を学んだ時、つくづくそうだったとさとりました。いつも先生は私たちとともに勉強しました。お習字、茶の湯、生け花、あのお姿に励まされ、ちようど司令官が先頭にたつてわれに続けと号令しているのと同じだと思ひました。またある日黒板を後ろにして「今日は皆さんに洋服の裁断をお教えます。実は昨日東京の一流の裁断師の講習を受けたばかりです。講習料は十五円（今の金額にしたら一万円以上）でしたが、皆さんの代表となつて覚え、そして教えるのです

から安いものです。私が一生懸命覚えてきましたものを全部差し上げますからそのつもりで……”と熱心に教えて下さいました。技術だけではなく、精神的な努力と、熱心と、愛情にうたれはぐくまれて、若い娘時代を柴田先生と過して参りました私の脳裏には、いつまでも生きて励し続けております”(高月敏江、大正十三年本科卒)

「大正十三年、私ら同級生五十人位だったでしょうか、本科二年となり、和裁、洋裁、英語、習字、生け花、茶の湯、作法などの教科で、今ごろの教科とは随分違うものでした。月曜日の茶の湯は桐原先生の時間で、みんなはまじめに、静かに習う中に、途中で室から抜け出てしまったこともある私ですが、不思議にも生け花の時間はおとなしく熱心にお習いしたことが懐かしく思い出されます。この年の夏ごろ黒々と光ったオルガンが備え付けられ、そのうれしさは格別で、よく放課後このオルガンで好きな唱歌を歌ったものでした。当時は女学校を卒えた人たちがよく入学しておりましたので、オルガンなども上手にひく方も多く、式の時など上手な生徒の一人が式歌をひいたこともありました。柴田先生は私たちのこうしたありさまを満足げに見守って下さったのでした。女でありながら校長などは、当時としては全く思いがけないことで、優しさの中に厳としたきびしさのあった校長先生を思い出し、同じ女でありながら、何がこのような違いをもたらすものかと、よく思ったものです”(芝田ふゆ、大正十三年卒)

開校当時の職員室は、階下の一室が当てられていたが、この部屋も畳敷きで、丸テーブルが一つおいてあり、そこに校長以下三人の職員がいるという寺子屋式のありさまだった。開校にそなえて

建物も改造し、校舎五十一坪、敷き地百七十六坪に拡張されたものの、百名の生徒を収容すると、三教室はいっぱいで身動きもできなくなつた。

一つの裁縫板に四人向い合わせに坐ると、後ろの人とは背中がぶつかりあうように狭く、ろくに顔を見ることができないありさまとなつた。やすはこれでは教室を早く増築しなければと、日夜考え続けたが、いかにせん資金がない。この状態を見て生徒の父兄の中にも同様な意見を抱く人があつて、こうした資金面のことについて協力することになり、そのため後援会を組織しようと動き始めた。

この動きを知つて親戚の佐野仙之助、今村要太郎も協力し、柴田後援会をつくることになり、翌十三年一月に総会を開いて三上直吉（弁護士）を会長に、対馬以佐美（元柏木村長、弁護士対馬完吉の父）を副会長に選んだ。これらの人のほか高杉英三、工藤友太郎、桜庭幸次郎、福士忠吉らも熱心に協力した。当初の後援会員は六十五名であつたが、一人百円出資で六千五百円の資金がまとまつた。そこで和徳小学校の旧体操場の一部を買収し、その材料で二階建て四教室を増築することになり、その年の五月に着工、七月三十日に落成式を挙行した。学校としての基礎がこの時ようやくできたのである。

またこのころつぎのようなこともあつた。生徒募集のために秋田県の大館町に出掛けた時のことだ。三月上旬だつたが、激しい吹雪に見舞われ、やすは風邪をひいてしまった。無理な日程で吹雪の中を歩きまわっているうちに、発熱し、悪寒をおぼえ、寒さにふるえてようやく宿に戻つた。花



大正13年3月、弘前和洋裁縫女学校の第一回卒業式。前列左から今村要太郎、桐原光三、杉山燾之進、石戸谷五郎、柴田やす校長、高山文堂、高杉英三、第二列左端白鳥武四郎

岡という旅館だった。吹雪の夜は冷たく、女一人の哀れさをつくづく感じて、涙が枕を漏らすのだった。その時、床の間の掛け軸が、涙でうるんだ目に映った。

百難心動かず

千辛気益々振ふ

万死天職に尽して

至誠鬼神を泣かしむ

大町桂月の書であった。床の中で、彼女は繰り返し読んで読んだ。「ああ、百難心動かず、千辛気益々振ふ……そうだ、泣いてはいられない。万死天職に尽して……、まだまだ死ぬような苦しみを私はしていない」何度も口ずさんでいるうちに、すがすがしい気持になった。翌日は薬屋から湿布剤を買って、それで胸に湿布をしながら、生徒募集の仕事を続けた。息苦しくなると「万死天職に尽して……」と口ずさみ、勇気を振り起したのである。

大正十四年には永山源之丞が県立弘前高女を退職し、この年六月から和洋裁縫女学校に勤めて、地理・歴史を担当して教えた。こうして和洋裁縫の「三山先生」の顔ぶれがそろったのである。

ここでやすの身辺の事柄にふれておこう。

弘前に移っていた義父の白鳥策太郎は、大正十二年四月二十八日に、萱町の自宅で七十五歳の高齢で亡くなった。やすは幼少時荒川の白鳥家に引き取られて育ったが、この人は政治家として県会議員三期、荒川村長を二期もつとめた人だっただけに、やすが弘前で学校を始めてからは陰の力になつて色々と励ましてくれた。やすにとつて血縁はないが、恩義のある人だけにその死を深く悲しんだのである。

大正十三年、やすが校舎の増築を計画していた春には、娘の敏が東京の渡辺女学校高等師範科を卒業した。この学校は三年制なので前年に卒業すべきであつたが、敏はその間に盲腸にかかり、帰郷して弘前市立病院に入院などしたため一年休学したのである。卒業すると、すぐ四月から県立弘前高女の裁縫手芸科教諭となつた。しかし、つぎの美穂子はまだ小学生であつたし、翌十四年一月十九日には長男一郎が生まれたから、家庭におけるやすは、母として主婦として大変忙しい体であつた。そんななかでも朝は五時前に起きて、学校の内外の清掃を欠かしたことがなかったという。

そうした忙しい体にもかかわらず、やすは依頼があると農村の裁縫講習会などにも出張して指導にあたつた。学校だけではなく地域社会のために、できるだけ貢献しなければとの信念だったのである。その一例として本間竹太郎の記事があるので紹介しておく。

「大正十四年の六月末、私は西郡車力村の小学校校長をしていたが、田植えがすんだあと、学区内の娘たちに裁縫の講習でもやって、家事教育の一助にしたいと考えた。柴田先生にお会いして私の企図をお話したら早速ご快諾され、私の学校に来られ、住宅にお泊まりになられた。やつと十三行きの小型バスが通った交通不便な時代である。柴田先生の講習は当時はやりのこどものカンタン服でした。会期は三日間でしたが、つぎつぎと完成させて、習うものも、観るものもみな感服した。第二日目からはアパ（若い田舎婦人）たちも習いにきた。そして先生は方法技術を教えながら、女としてのしつけにふだんの注意をなさった。処女会後援会のオガサマたちも参観にきた。オガサマたちとお話してるのを、はたから聞くと、常にくるお客様には手にしている裁縫なり、つくろいものなりの手を休めないで、対応しても失礼にはならぬ。また炊事しながら対応してもそのとおりだ」などと語られていた。なんと活動的な、能率的なお話だなと、私はふーんと考えさせられた。私の企図した講習会は、先生のお陰で大好評に終了した。そして口々に称賛する声が高かった。その後私は転任して別の学校へ行くごとに、その学区の娘たちに先生の思想を普及したいと思って、必ず一度は講師にこられることをお願いした。そのつど快諾されて、交通が不便でもおいでになって下さった。先生の講習にこられたところからは、不思議に勧誘しなくとも入学志願者が出た。これは直接受講の娘たちよりも、これを通して父兄の方が感動せられるのだと思われる。先生の教育力が強烈だったことがいまさらのように思い出される」（「柴田やす女史追悼録」から）

このように自分自身はもちろんのこと、卒業生たちにも村へ帰ったら地域の人びとに、よく指導

するようになるといつけたのである。現在の婦人学級、青年学級がやっていることを、大正時代に実践していたわけである。

また当時郡部から入学した生徒は学校に寄宿させた。だが寄宿舎の建物が別にないので、二階の教室での授業が終わると、裁縫板などを方づけて寄宿生の部屋に早変わりするのだった。だから寄宿生は家族と同様で、校長一家と同居した大家族制度だった。春、弘前の観桜会には、日曜などやす自ら花見弁当をつくって、寄宿生を連れて一緒にお花見をした。また遠足の時もふだんとは違った弁当を用意してくれた。お盆などでも、遠方からきていて帰省しない寄宿生は、今村家の菩提寺である新寺町の西福寺にともなっていた。まったく母代わりであった。こういう家庭的な温情のこもった教育のやり方は父兄に感謝され「柴田の寄宿舎におけば安心」だと信頼された。

こんなだから生徒との親しみは深く、たとえ叱られても不平をいうものがないかったという。教え方がきびしいが、それが真実の教育愛から発するものであることを、生徒たちはよく理解したのであろう。

それを伝えるつぎのような話がある。

「ある夏のことでしたが、早縫い競争がありましてしたたる汗を拭う間を惜しんで夢中でお針を運んでおりました。ふと、背中の方から涼風がさつと吹いてくるのです。ふり返って見ますと、校長先生がいつのまにいらしたのかニコニコされながら「ほら、愛の風だよ」と、お湯屋さんで使うような大きな団扇で、私たちをおおいで下さっているではありませんか。あの時の校長先生の面影

が、今もおりおり浮かんでくるのです。五つほどの教室と作法室とそれだけで、講堂もなければ運動場にも恵まれない学び舎でしたが、でも私たちには天国でした。校長先生のきびしいしつけのもとに、半面、母親のように優しい温情に諭されながら私たちは乙女心に希望を燃やして、学課やお針に専念いたしました。そのころ、市内に家政女学校というライバルの学校がありました。かえってよい励みになったように思われます」（高橋きよ、昭和四年師範科卒）

大正十二年に公認となつてからは、ますます順調な発展をつづけ、年ごとに生徒もふえ、十五年には在校生二百五十名ほどになつていた。生徒は県内はもちろん県外からも入学志望者がふえ、私立の女子の学校として、弘前の和洋裁縫女学校といえは、「あの柴田さんの学校か」とすぐわかるほどの存在となつた。

ちやうどそのころ、弘前市内にもう一つ女子の学校ができた。私立弘前家政女学校である。校長は小山内もと子で、県立弘前高女教諭だったが、大正十五年に退職すると同時に、市内山道町の自宅に家事裁縫専修所を開いた。そして翌年（昭和二年）には校舎を建てて家政女学校を設立したのである。この学校も和洋裁縫女学校とほとんど同様で、和裁を主に家事一般を教え、市内のみならず郡部の子女を集めたので、「和洋」と「家政」と呼ばれて両校併立することになった。

またこの当時の県立弘前高女と私立の弘前女学校（ミッシヨン）にもふれておこう。弘前高女は大正に入つて志願者が増加したので定員増をつづけ、大正十四年には六百名であった。校舎はつぎつぎ増築され、また十三年には寄宿舎もできて、郡部出身者の便をはかつていた。このころからス



ポーツがさかんになり、テニスやスキーで県下に名をなした。生徒の制服も十一年から和服を廃してセーラー服になり、洋服に合った黒いツバ広の帽子に白いリボンをつけ、近代的な女学生スタイルとなつて、洋装のトップをきつた。

私立弘前女学校はメソジスト系のミツシヨン・スクールで、大正四年に青山女学院院长ミス・ラッセルを校長に迎えてから、その発展がいちじるしかった。生徒数も大正四年の六十名から十年には三倍の百八十名になり、六年からは本科（四年）卒業生は、公立高等女学校卒業生と同資格を与えられることになつた。ここでも寄宿舎を設けて郡部からの就学者の便をはかつていた。

こうして大正末期ごろの弘前の町は女学生の姿が人目をひき、女学生の花盛りというありさまだつた。一般父兄も従来のも「女に学問は不必要」という頑固な考え方が、ようやく改められ、女子の修学熱は非常に高まつたのである。

やすの和洋裁縫女学校も、このような風潮が反映して志願者がふえる一方なので、校舎の増築を考えなければならなかつた。それにはまず校地の拡張が先決問題である。またそれと同時に卒業生に正式な資格を与えるためには、学校の昇格を考えなければならぬ。「生徒のためになんとしても立派な学校にしなければ……」と、日夜その構想を練つたのである。

まず昭和二年二月には学則を改正し、予科、本科、専攻科、高等科及び速成科をおくことにし、四月の新学期から実施した。一方、柴田後援会にはかつて、校地拡張のための基金募集を開始することになつた。そして入学式が終わるとすぐ、校長はじめ職員が後援会役員ともども基金募集運動



昭和3年ごろの柴田やす

を展開した。

もちろん校長が率先陣頭に立ったのである。徒手空拳、女の身で金を貰いにゆくことは、たとえ学校という教育機関をつくる寄付金ではあってもつらいことである。とにかく誠心誠意でぶつかってゆくより方法がない。しかし人は十人十色、それぞれ異なる性格をもっている。誠意が通ずる人もあり、まったく通じない人もある。ただ通じないばかりか、売名者、女山師、インチキ学校などと白眼視するものすらあった。またなかには何度たずねても門前払いをくわせるものもある。しかし、その目的を貫くためにはそうした冷遇冷視をも耐えしので、相手の同情にすがらねばならなかったのだ。いかに男まさりといわれる彼女でも、しよせん女である。時には心もからだもくたくたに疲れて、「どんなに精魂をつくしてもできないものではないのか……」と、無力感に襲われ、女一人の寂しさを泣く夜もあったという。また、つぎのようなこともあった。

ある有力者の紹介状をもって、青森のある富豪を訪ねた時のことである。やすは初対面の人でもあり礼をつくして、その所信を語り、応分の寄付を願った。黙って聞いていたその人は、やがて「予算はいくらで、何人の生徒を入れるのか」というので、「寄付が集まってみないと、何人の生徒を入

れるようになるかわからないのです」と答えると、突然その人はハッタとにらみつけ、「この山師も」と怒鳴り、奉賀帳（寄付簿）を手に取るなりやすの顔に向かって投げつけた。やすはあまりの口惜しさにはらわたが煮えくりかえる思いであったが、それをからくもこらえて辞去した。

帰途の汽車のなかでも無念の思いで、いつ弘前の駅についたかわからないほどだった。そして放課後の職員室に一人入って泣いていた。そこへ高山文堂がひよっこり立ち寄った。文堂は他の用事で近くまできたのだが、何気なしに学校に寄ったのである。しかし、やすの様子がいつもと違うので聞いたのだ。

やすは青森でのことを話し、「あまりに腹が立つので、今日限り募金運動をやめて、学校は現在のままを守りつづけて暮らそうかと、思案しているところですよ」といった。文堂はそれを聞くとカラと笑い、「まず酒を一合買ってきてくれませんか」という。やすはいわれるままにありあわせの酒肴を出すと、文堂は一杯かたむけながら、釈迦の一代記を語り「釈迦にも提婆達多という妨害者があつたが、釈迦はそのために成功した。今日あなたが会った人はその役割りをしたようなものだ。悲観したり憤慨するよりも、大いに発奮し、明日から勇猛心をふるっていつそ募金に精を出しなさい」と諭した。そして白髯をなでながら「よし、よし、手分けをして、明日からは私も歩こう」といい、たちまち筆をとって市内の有力者十三名に紹介状を書いてくれた。やすはこの時のことを肝に銘じ「文堂先生のあの励ましは、私の一生をきめ、また今日の学校の基礎をつくってくれたものです」といつも人に語って聞かせたという。

こうして春から夏へ、夏から秋、冬へと募金運動がつづけられた。夏の暑いさなかに郡部の農村に出掛け留守というので田んぼまで捜して歩くなど、一日かかって三軒回るのが精いっぱいだった。冬はまた野合いの吹きだまりに道をふさがれて立ち往生し、通りがかりの馬櫓によく助けられたりした。また下北地方に出掛けた時には、途中で旅費が心細くなり、旅館の番頭に駅まで送ってもらっても、五十銭のチップがなくて、恥をしのんだこともあったという。

とにかく、こうした血のにじむような努力の甲斐があつて、ようやくやすの身边にも必然的な変化が起つて来、それを契機として、柴田学園の目覚しい発展を繰り広げてゆくことになった。すなわち翌三年一月四日には、娘敏への婿養子縁組があつて、身内の協力者を得た。ついで同年三月十四日には、隣地一八八坪を購入して、校地校舎を拡張し、翌十五日には文部大臣の認許を得て、各種学校から一躍実業学校令による甲種職業学校として、女子中等学校の列に加わるや、まさにやす本命の活躍時代に入ったかのごとく、次々に校地、校舎はもちろん、内容組織の改善拡張を、毎年のごとく推し進めていったのであつた。まずこのたびの昇格により本科（四年制）のほか師範科、専攻科、専修科を設置するべく文部大臣あて申請中であつたがこの年の三月十五日認可となつた。本県で初めて私立中等学校としての職業学校の設立をみたのである。同時に師範科修了生に対しては試験の上、小学校裁縫専科正教員としての免許状が下付されることになった。（翌四年からは無試験検定許可）

この昇格によつて、本科卒業生は高女卒業生と同じ資格となり、専門学校や高等師範学校への入

学資格が与えられ、また中等教員受験の資格も得たわけだ。当時、実業学校令による女子の実業学校としては宮城、山形両県について東北では三番目の認可であったという。

昭和三年に文部大臣の認可を受けた当時の、弘前和洋裁縫女学校の職員及び担当学科はつぎのとおりであった。(このなかには嘱託講師や助手もふくまれている)

杉山薫之進(教、国、数)、永山源之丞(修、歴、地)、高山文堂(国、書)、今村誠城(数、図、体)、今村敏(手芸)、時任あい(同)、神田岱穂(国)、小野義夫(物理、化学)、玉田忠太郎(英)、神崎一美(家事)、白鳥武四郎(体操)、杉沼友七郎(心理)、斎藤謙吉(博物)、対馬完吉(法律)、桐原くに(茶、花)、油谷いち(国、家事)、田中きよ(家事)、黒滝セツ、工藤みつ、中村テイ、小笠原みゑ、高田やゑ、福地せつ、芳賀きさ(以上裁縫) この他に校医として小野芳甫があたった。

大正三年、市内鍛冶町の借家で、やす一人で十五人ほどの娘たちに裁縫を教えた時から足掛け十五年目、いまや教職員三十名、生徒数二百五十名を数える女学校に成長したのである。まさに苦闘の努力が報われた。この時やす四十八歳であった。鍛冶町や北川端町で裁縫塾をやっていたころ、習いに来ている娘たちに「きつと私は裁縫の大きな学校を設立しますよ。したらあなたたちの娘さんを入学させてね」と、目を輝かして語ったのであったが、その夢が見事に実現したのであった。この年の生徒募集は本科六十名、研究科二十名、専修科二十名の計百名であったが、入学願書締め切り日の四月六日を待たず、二日で定員いっぱいになったほどの人気だった。

また学校では、生徒の実習の材料は市内の呉服店や一般家庭から依頼を受けていたので、その収



左から高山文堂、杉山燾之進、永山源之丞

入は毎月約百五十円に達していた。学校ではそれを生徒へ分配していたが、本科三年生になると毎月一人三円から五円の収入があった。なかに腕のよい生徒は二十円もの収入をあげるものもあり、学費はもちろん嫁入り仕度の貯金までしたという。しかしそれら依頼の仕立て物を納める時には、校長自ら必ず一点ずつ確かめた上でなければ、決して外へ出さなかったのである。

やすは文部大臣の許可を記念して校章を制定した。これは梅の花を形どったもので、現在もなお使用されている。彼女は日ごろから梅の花を愛し、梅の花が、きびしい風雪にたえて美しく香り高く咲くことは、女性のシンボルであると、つねに生徒たちに語った。そして

塵埃一点を侵さず

無限の氷姿世外に抛つ

共に見る一生素質を懐くを

天々たる桃李交はるを容さず

という大塩中齋が梅花に寄せた詩を好んでいた。物欲や名利にこだわらず、艱難辛苦にもくじけない志操、それを自らの理想としていた彼女は、この学校の精神とすべく校章に取り入れたのであろう。

またこの時校歌を制定することになり、当時官立弘前高等学校教授で、国文学者、歌人の弥富破摩雄に作詞を依頼した。作曲は東京高師教授の田村虎蔵で歌詞はつぎのとおり。

弘前和洋裁縫女学校々歌

一、みそらに高き岩木やま

ふもとに広き津軽野辺

高きをとほのみさをにて

広きをつねのころとす

二、春はかすみのころも裁ち

秋はもみちのにしき縫ふ

たちぬふわさをしら糸の

ちりにけがれずひとすぢに

三、むつびかはしてをとめどち

ほたるのひかりゆきのいろ

あつめずまなぶ大御代に

うまれあひしをかしこみて

四、世はさまざまにかはれども

かはらぬものはひとの道

あらぬこみちにさまよはで

すすみ進まん日に月に

校歌制定式は開校記念式に併わせ、昭和三年十一月四日に行なったが、つぎのような事情があった。

この年四月八日、昇格第一回の入学式並び始業式を行なってまもない十八日に弘前は大火に見舞われた。この前年の二年五月にも北横町の遊廓から出火、四百三十九戸を焼くという大火があったが、三年四月の大火はそれを上回るもので、富田町から出火、全焼六百十戸、半焼十九戸という大被害を受けた。この時は富田から品川町、松森町、中土手町、上土手町から代官町、駅通りまで広がり、上瓦ヶ町にも及んだ。さいわい和洋裁縫女学校は難を免れたが、近隣の家も焼けたので、毎年六月二十六日に行なっていた開校記念式を遠慮し、十一月まで延期していたのである。

またこの年の十一月には、いまの天皇の御大典（即位式）が行なわれたが、やすはこの時に教育功労者として地方賜饌に選ばれ、さらに弘前市で御大典記念事業に行なった市の功労者表彰でも、教育功労者に選ばれ表彰された。



このように学校のことや公の面での喜びが重なったが、家庭的な面でもおめでたがあった。それは前記のように、この年の一月早々、娘の敏に婿養子を迎えたことだ。新郎は西郡岩崎村出身で早稲田大学政経科卒業の七戸誠城（明治三十二年五月十六日生）である。前にも書いたとおり、やすが柴田家に嫁いだので生家今村家は廃絶となっていたが、この時今村家を再興することに決め、新夫婦は今村姓を名乗ることになった。敏は県立弘前高女教諭として勤めていたが、母の経営する和洋裁縫女学校にも講師として週二時間被服学を担当して生徒を教えていた。夫の誠城は結婚と同時に和洋裁縫女学校の教師となり、数学、図工、体育などを担当したのである。誠城三十歳、敏二十六歳であった。若い二人は生徒たちのあこがれのまどで、寄宿舎生などは「お兄さん」「お姉さん」と呼んで親しんだという。

さて、やすの着眼が非常に進歩的で、自分でこれはよいと思ったことは、どしどし実行に移したが、そのなかでもバザーと修学旅行の実施は、その先鞭をつけたものであった。当時「和洋のバザー」といえば弘前市民の人気を呼んだもので、大変な盛況だった。大正十四年十二月に生徒成績品展覧会ということで始められたが、年々盛んになり、市内の名物となった。昭和三年には御大典記念生徒製作品バザーと銘をうって、十月二十日から三日間開かれたが、新聞はつぎのように報じた。

「店開きの二十日開場前すでに手芸品、生け花、盛り花、仕立物など約七百点もが陳列され、生徒の手料理からなる食堂部もすっかり出来上がり、いよいよ開場と同時に衆目を奪う逸品ばかり、おまけに値段は実費だから売れることすばらしい。臨時の美しい店員さんは、袴にタスキ掛けの忙し

さ、食堂部のコックさん、ガールさん二本の手もたりないというありさま。おかげで売り物は一日で全部品切れの大繁盛、ここばかりは不景気風はどこかとうそぶき、柴田校長さん喜ぶこと大したものであった。二日目の昨日は売り物がなく店がさびしいが、仕入れるわけにもゆかず大馬力の夜業でどうにかまにあわせたが、昨日は同窓会に日曜とあったので、入場者さらに増加、またまた全部品切れの盛況を呈した」（昭和3・10・22「弘前新聞」）

バザーはこの新聞記事のとおり大変な盛況だった。ことに生徒の手になる振り袖に打ち掛けといった豪華な花嫁衣装や、紋付重ねなど、裁縫学校ならではの見事なもので人目をひいた。即売品の縫い物や手芸品の人気も大変なもので、開場と同時にまたたくまに売り切れるという騒ぎだった。それに女の学校のバザーなので息子の嫁さがしにやってくるオガサマたちも多く、その品定めに向、タカの目という光景もみられた。

修学旅行も女学校としては早く、昭和三年六月に往復三日間の日程で、函館方面に管外旅行をしたのが最初である。これは県立弘前高女が昭和七年に札幌へ修学旅行したのより四年も早かった。

また時代の動きを敏感にとらえ、東京から洋行帰りの先生を招いて洋裁、手芸の講習会を開催したり、上野の精養軒の調理士による西洋料理の作り方、会食の仕方など公開した。これらは生徒はもちろん、市内の婦人たちからも歓迎されて盛況だった。このほか、生徒のために、よく名士に依頼して講演をしてもらった。

ことに一般市民と深いつながりをもったのは、昭和四年から始めた国債償還献金仕立物週間であ

った。これは十カ年継続で一千円の寄付をしようというもので毎年十月末ごろから一週間、市民からの仕立物の注文を受け、この期間は特別安い工賃でサービスをし、その収益のなかから国債償還基金として寄付するのである。毎年百円を目標にして計画したもので、当時の新聞に「乙女たちの汗の結晶を愛国奉仕」として讚えられた。これはその後も続け、さらに昭和六年には弘前市内の貧困者救済資金として別に寄付し、同八年からは出征軍人の家族慰安会や敬老会開催などに発展した。

この週間には全校生徒が協力して冬仕度に忙しい人びとに奉仕したので、市内の主婦たちから非常に喜ばれ、「和洋の仕立物週間」といって待たれる行事の一つであった。また敬老会の時には、身寄りのない老人たちに綿入れの着物を贈ったので、これまた非常に感謝された。このようにやすの教育方針はただ学校内だけではなく、地域社会との密接なつながりを重視したところに、独自の特色があったのである。

さて、昭和四年からはまた第二回目の寄付金募集が始められた。これは前年に文部大臣の認可を受けた際の条件のなかに、運動場を備えることになっていたので、そのために敷地拡張を急がねばならなかったからである。また卒業生たちによって御大典記念事業として、作教室新設が提唱されたことが契機となつて、それと同時に講堂や教室もあわせて新築すべきであると、後援会が積極的にか動きだした。そして増資新築が決議されたのである。この後援会は大正十三年にできたもので、当初は六十五名の会員で発足したが、その後弘前和洋裁縫女学校後援会として組織を拡大した。県下各地の有力者を会員として数百名に及び、昭和二十一年東北女子専門学校の設立直前まで続き、

学校設立以来二十数回にわたる、校地校舎の拡張発展に大きな力となったのであった。

この募金運動にさきだつて、学校に顧問をおくことも決められた。その結果、一戸兵衛、成田軍平、渡辺滋、土岐やす子、木村繁四郎の五人が選ばれた。渡辺滋は娘の敏が卒業した東京の渡辺女学校長であるが、他の四人はいずれも弘前市出身者で郷党の大先輩である。一戸兵衛はいうまでもなく陸軍大将、学習院長、明治神宮宮司で、人格高潔をもつて知られた武人。成田軍平は東奥義塾、札幌農学校出身で滋賀県水口農学校長などを勤めた農学士。土岐やす子は弘前女子師範学校、東京女子高等師範学校出身で京都府立第一高女校教諭など勤め、また賀陽宮家の御教育掛りなどした女流教育者。木村繁四郎は東奥義塾、札幌農学校出身、神奈川県立第一中学校長となり、のち全国中学校長協会主事の職にあつた人である。

後援会の積極的な応援と、やす子の東奔西走の努力が実つて集められた寄付金を資金として、この年の九月から校舎新築に着工した。これは木造二階建て二百坪で、階下は作法室と専攻科、師範科の教室、階上は大講堂（五間×十七間）に当てられた。作法室は官立弘前高等学校の弥富教授の設計になるもので、畳敷きの大広間である。講堂は約千人収容できるもので、当時の学校施設としては目をみはらせる堂々たるものだった。このほかに旧校舎に割烹室を増築、またかねて懸案の屋外運動場として二百五十坪の敷地を拡張した。そして翌五年三月十五日に新校舎落成式を盛大に挙行了たのである。当時の新聞は落成式の模様を報道するとともに、つぎのような記事を掲載して柴田校長の手腕を讃えた。

「弘前和洋裁縫女学校は単純な裁縫の家塾から、今日五百五十人の生徒を收容し得る大校舎までにこぎつけたが、昨年の秋、講堂と作法室を増築し、昨日これが落成式と、引き続き後援会員の物故者と、死亡学生の慰霊祭を盛大に行なつた。知事代理、市長代理、弥富弘高教授、市会議長以下市議會議員、後援会員、市内各小学校長、新聞記者らをはじめ、父兄百数十人参列の大盛況を呈したが、今明両日はバザーを開く。女の腕一本でここまでたたくあげたことは偉いかな。女で学校を経営するなどは大都市ならいざ知らず、田舎の都市では實際珍しい。今日五百五十人の未来の良妻賢母を養成しつつあるのだから、校長柴田やす女史の手腕賞讃に値すると思う。校庭や日はうらかに梅桜」

なおこの落成式の参列者のなかには、地方の有力者で、また大口寄付者の安田才助、宮川久一郎、藤田久次郎、今泉銀次郎、佐藤誠四郎、野村音次郎らの名前もある。

またこのころ、津軽義孝伯爵からも賛助があり、木村静幽の遺族からも寄付があつてやすを感激させた。木村静幽は弘前出身の実業家で、昭和四年に八十歳で亡くなつたが、その遺志によつて一千円が遺族の手で寄付され、学校ではこれを基本金に繰り入れた。

さらに当時やすを感激させた出来事が二つあつた。それは昭和五年十月四日に帰郷中の一戸大将（顧問）が同校を訪ね、新装なつた講堂で全校生徒に講演したことと、翌六年五月五日、津軽伯爵が来校したことである。余談だが一戸大将はこの時の帰郷が最後となり六年九月二日に七十七歳で世を去つた。

また新校舎落成式挙行にさきだつて五年一月に「校訓」を制定したことも重要なことなので書いておく。「校章」「校歌」に続いて「校訓」を制定する必要があり、やすはその起案を永山源之丞に依頼していた。永山は校訓作成にあたつて慎重に案を練り、やすの意思を幾度か確かめ、また先輩杉山、高山両先生の意見をたたき、ようやくつぎのように決定した。

#### 校訓

- 一、常に清浄の心を養つて品性の向上に努むべし
  - 一、人に対して和顔愛語事に処しては親切にいねいなるべし
  - 一、所作と言語とは快活優雅なるべし
  - 一、長幼序を正し上下礼を濫さざること
  - 一、不断の心掛けをもつて勤儉なるべきこと
- この「校訓」について、のちに柴田学園理事長、東北女子短大学長となつた松野伝博士はつぎのように述べている。

「東洋的女性特有の倫理観と、その訓育的指導は、今日新教育として取り上げられ、論議されている生活教育のうちに、混然と融合せられ、よく徹底したのでその卒業生は温順にしてよく働く家庭的女性として、社会から歓迎されたのである。これというのも、柴田女史は生活教育者として、欠くべからざる大きな社会愛、親切、寛大、相互尊敬などの美德の体得者であつたればこそである」

昭和五年の新校舎落成によつて講堂、作法室、割烹室、それに運動場などが整備され、学校は施

設内容ともに充実した。そして昭和四年に師範科卒業生に小学校裁縫専科正教員無試験検定が許可となっていたのに続いて、昭和七年には同科卒業生に小学校家事科専科正教員無試験検定も許可となった。

また昭和八年二月には高等師範科の設置が文部大臣から認可された。この年はちょうど学校創立十周年にあたるので、これを記念して校舎の大増築をおこなうことになった。

さて、このころはひどい不況に襲われた時代である。昭和六年は東北地方が大凶作に見舞われ、本県では特に西北両郡が甚大な打撃を受け、この地方の男たちは出稼ぎ、女たちは女工や接客婦に身売りさせられた。しかも当時は全国的に農村恐慌が深刻化する一方で、農民は不安におびやかされていた。この最中に満州事変（昭和六年九月）が勃発、つづいて満州国（昭和七年三月）が成立したが、国内では五・一五事件、神兵隊事件など血なまぐさい暗殺事件が相次いで起こり、世相は騒然としていた。

不況の深刻化、慢性化のあおりをうけ、県内の私立学校のなかには経営難におちいるものもあった。昭和八年当時における県内の私立学校は、中等校令によるもの一、高等女学校令によるもの二、職業学校令によるもの四、各種学校として八、その他特殊教育機関として盲啞学校二、幼稚園十一である。このうち県内私立学校中の名門校である東奥義塾ですら、生徒募集に困難をきたす状況であった。また当時青森にあった私立協成高等女学校では経営難のため、生徒を利用して資金の借用に歩かせたということで問題になった。そこで県では昭和八年四月に私立学校の経営ならびに実態

調査を実施している。当時の新聞はそれに関してつぎのように報じた。

「青森市栄町私立協成高等女学校主は学校経営難から、資金調達のため有価証券の偽造行使で、目下東京新橋署に留置取調中であるが、打ち続く不況に、さらぬだに経営困難の青森県下各私立学校は、いずれも経営困難で、しかも認可当初と事情を異にし、有名無実なかには教職員の俸給も支払わぬところもあり、弘前和洋裁縫女学校の如く模範的経営をなし、校長の人格と職員の指導よろしきを得て、むしろ経営はすこぶる楽なため、生徒数の如きも県立学校でさえ募集難におちいつているにもかかわらず、押すな押すなの盛況ぶり、増築工事に着手するなど異例もあるが、多くは経営難におちいつているところから、県としても協成高女の如き不祥事の勃発を、未然に防ぐため、近く係員を派遣して、県下の各私立学校の内容を調査することになった」(昭和8・4・26「読売新聞」)

このように深刻な不況のさなかにもかかわらず、和洋裁縫女学校だけが私立学校の経営難をよそに、まったく例外的に発展の道をたどったのである。この間に施設面でも教室の増改築をたびたびおこない、また教員も増員して内容の充実に努めた。当時の教員である三橋昇弼(京大出身、法学士)はつぎのような思い出を記している。

「昭和六年二月、学校を出たばかりの私が初めて勤務して数日後、職員会議があったさい、私がうっかり校長先生の蔭口をいったがために、あとで呼びつけられて頭ごなしに叱りつけられました。その時校長先生の剣幕と気魄に完全に小さくなってしまつて、それから一生懸命勤務するようになった



のでした。最初の職員室は畳敷きで、一隅に大きな炉が切っており、杉山、永山、高山といういわゆる三山の老先生方が、ゆったりと白髯をしごいて坐っている側には、猫が眠っておりまた校長先生のお孫さんが這いずりまわっているという実に家庭的なものでした。公立学校の職員室とはおよそかけ違った感じのものでしたので、最初は大分面くらいました。これこそ私立学校のよい点であり、また校長先生がよくいわれた教育即生活の一つの表現だと思ったのです」（柴田やす女史追悼録）

このなかに「校長先生のお孫さんが這いずりまわって……」とあるのは、今村誠城、敏夫妻の長男城太郎（昭和五年二月三日生）のことである。職員室のなかで女校長の幼い孫が遊んでいることなど、まことにほほえましい光景である。またこの年（昭和五年）の三月には、敏の妹美穂子（のち安津子と改名）が県立弘前高女を卒業して、姉の母校である東京女子専門学校に進学した。

さて三橋教諭は昭和十四年まで同校に勤めたが、「こうした職員室も、学校が大きくなつて、先生の数が増えるに従つて、畳がなくなり、イス、机が変わつて、普通の職員室にはなりましたが、その精神は変わらなかつたようです。校長先生を中心にした実に家庭的な職員室でした。小使いは笹木さん一人、給仕もなかつたので、男の先生も来客の取り次ぎ、電話の応対、火鉢の炭つきまで、何でもやらされたものです」と書いています。

また当時官立弘前高等学校教授で、和洋裁縫女学校の講師をした三浦圭三はつぎのように回顧している。

「私が和洋裁縫女学校に新設された高等師範科で、教育、国語の講義をすることになり、毎週一回出講したのは昭和八年の十月中旬からで、爾来十二年余、昭和二十一年私が退弘するまでごやかになりました。はじめて登校した時には、先生みずから案内に立って校内を一巡せられた。そのことばのはしはしには、あふれるばかりの学校愛、校舎愛がこもっていて、いかにもこの学校の生みの母であり、この学校の全支配者であると思った。一巡を終わって応接間にかえり、将来の構想を語り、ゆくゆくは、もつともつとこの右側と後方の拡張をして、これこれの設備をしたいと思っているのですが、なかなか一気にそこまでは手が届きません。私は一步一步、自分の実力を測り、身のほど過ぎたことには手をつけたくない。それでいてまたいつも現状に甘んじて、もうこれよ！とおちつくことも出来ない性分なので、まことに困ったものです」といつて笑っておられたが、困ったものどころか、これこそ先生の最も貴いご性格で、いわゆる（次第太りの雪ころがせ戦法）を自分の性格によつて、こなしえられたものである」

また「三山先生」についてもふれている。

「その次ぎの週には、杉山氏が来られて、氏はちよつと会釈してすぐ職員室へゆかれた。するとそのあとで、柴田校長が私に向かって、杉山氏の家柄、お人柄についての話もあつて、もとは藩の家老という立派な家系だとのことに、私は「もうよほどのご老体のようですが、何をお受け持ちですか」と聞くと、「別にこれときまつた学科は受け持つてはいただきます」では事務のお係りは「それも定つておりません」「そうですね」といつた私には、それではまるで「養老院みたいですか

…“といった気配が見えたものか。実は当校創立の際から何かとお智恵を借り、お助けを願いました。市・市の有力者に渡りをつけてご尽力下さった方々、永山、杉山、高山というこの三人の山のついた先生は、本校の三長老と仰いでいついつまでもそのご恩を記念致したいと存じますので、何もご用はなくともやはり本校とは手を切らないで、おりおり天気のよいお気の向いた時には、ご自分の隠居所へでもくるつもりで、おいで下さるようお願いしているのです”といわれた。私はこれを聞いて、世にも美しい重厚な人間性をそこに見、まれなる人情美にふれて感歎した」（柴田やす女史追悼録）

当時の生徒たちの思い出を紹介しておこう。

「手前は古びた病院を思わせるような洋風まじりの二階建てと、棟続きに和徳小学校の体操場を改造したという二階建ての校舎。教室はいずれも畳敷きに裁縫板の机でした。昼は教室ですが、終われば寄宿舎生の憩いの場となり、だんらんの室であり、食堂とかわりそして夜は安らぎの室となるのです。私たちの室は体操場を改造した方で、夏は広々として涼しくしのぎよいが、寒風吹きまくる冬となれば夜具の上に、うっすらと白いものがのっているのもたびたびでした。当時はストーブもなく、火鉢で暖をとったものです。不自由や、暑さ寒さに堪えることを当たりまえと思っていたそのころは、誰一人不平をいう人もなく、みんな仲良く非常に楽しく過ごしました。起居を共にする人たちの思いやり深く、ある物は分け与え、さびしい時には慰めあって力となり、素直に明るく気持ちよく働く習慣が、この寄宿舎で培われたのです。それは一つ屋根の下で寝食を共にされた

校長先生ご家族と、先生の温情ある家庭的な生活指導によるものだと思います。朝夕の挨拶はもちろんのこと、掃除の方法やふとんの上げ下ろしについて、食事の手伝い、来客の応対など実際の教育が、慈愛をもってこまごまと指導されるのです。信仰心にあつい先生は、神棚をしつらえてある室に一同を集め、礼拝してから食事するのがならわしでした。また時には、精神修養のためのお話や、身の上ばなしをしみじみと聞かされたのもこの室でした。殊のほか質素と和合を信条とした先生は、生徒と食事を共にされながら食事作法の指導です。いつごろから始まったか忘れましたが、食事訓を唱えるようになりました。（これは全校生徒が担任教師と昼食を共にしても唱えられた）

一、一粒の米も一茎の菜も皆四恩の恵みなれば、常に感謝の念を以っておいしくいただきますように。

一、食物は健康を保つ良薬と心得常に感謝の念を以っておいしくいただきますように  
一、食物は味のよしあしをいわず常に感謝の念を以っておいしくいただきますように

このようにすべてが感謝と祈り、そして体験を通しての生活を習慣づけられて来ました。それで当時は「嫁を貰うなら和洋の卒業生を」というのが世評だったと聞かされました」（伊藤トワ、昭和六年師範科卒、柴田女子高校教諭）

「そのころ女の先生方はみんな長い袖の着物に袴というスタイルであった。校長先生も和服に白足袋という格好であった。黒っぽい着物に白のハンエリが印象的で、いつも身だしなみはきちんとしていた。毎朝生徒は講堂に集まり朝礼があった。校長先生が壇の上に姿を現わすと、みんな静粛

になったものである。今と違って人数が割り合い少ない関係もあつたろうが、朝礼する時の様子はたくさんの生徒が、わが子のように見えたにちがいない。朝礼で思い出すことがある。みんな静粛にお話を聞いている時ゴホン、ゴホン咳をする生徒があつたので、壇上から大きな声で叱つたものである。咳の仕方が無作法だというのであろう。校長先生は袂からハンカチを取り出して、口に当ててちよつと下向きになり、＼こうして咳をするのですよ＼と実演して見せたものである。咳が出たらカボチャのタネを煎じて飲めば、治るものであるという言葉を何回となく聞いたものである。

その時の光景が鮮明に目の前に浮かんできて仕方がない。また校長先生は、女の一生はいつどのように変化するかもわからないものであるが故に、裁縫の技術を身につけておれば、いつか役に立つという意味の言葉は、先生自らの体験より生まれた言葉であり、今でも鮮明に脳裡に焼きついて一生忘れられないことである」（千葉キヲ、昭和五年師範科卒、柴田女子高校教諭）

以上の当時の生徒たちの思い出でもわかるとおり、やすは自分の信条に基づいて独特の校風をつくりあげたのである。それにはいわゆる＼和洋の三山先生＼の献身的な協力があつたわけだが、とにかく私学ならではの家庭的、家族的な雰囲気のみなぎっていたようだ。それはつぎの生徒たちの先生に対する印象記からも十分想像されよう。

「杉山先生はホテイさま、ヂイチヤのアダ名のようにいつもニコニコと生徒間にもよく親しまれ、またお名前のようにいつもお訓話の永い永山先生には、生徒もしまいにはアキアキして、コックリはよい方で、ガヤガヤ勝手な話し声にはいつも私どもをハラハラさせたものでした」（山口のぶ、昭

## 和四年師範科卒)

「ゼスチュア たつぷりで講義する杉山先生の教育学は面白く、白髪頭の丸坊主に詰襟が今でも浮かびます。弁舌さわやかに、切れ味のよかつた三橋先生の講義も魅力だったし、永々と語る道徳に、しびれを切らされた永山先生の講義も、その後どれだけ薬になったことか。お兄さん、お姉さんと呼ばれ、親しまれた今村先生夫妻、いつも笑顔をはなさなかつた黒滝セツ先生、みんな家庭的なよい先生方ばかりでした」(工藤せつ、昭和五年師範科卒)

さて、話をすすめよう。

やすの堅実な学校経営は当時の経済不況の波を見事に乗り切り、私立学校としては異例の発展を続けたが、創立十周年を迎えた昭和八年には高等師範科の新設が文部大臣から認可となつた。認可は三月十七日付けであつたから、さつそく三月から三十人募集することになつたが、これで従来の本科、専修科、師範科、専攻科の二百五十人にあわせて二百八十人の生徒募集となつたのである。

高等師範科新設で、一躍専門学校級の学校として宮城県を除いては、東北、北海道にない資格をもつ学校に昇格したのである。この科は、いままで裁縫科、家事科小学校専科正教員の免許状を無試験検定で得ていた師範科(一カ年)の上にさらに二カ年の修業年限で裁縫科中等教員の免許状を無試験検定で得ることができるのであつた。これによつて第一回卒業生(昭和十年三月)からはその資格が与えられるわけで、当時としてはこの中等教員免許状を得ようとすれば、東京や仙台の学校に入学するほかなかつたのが、和洋裁縫女学校の高等師範科新設によつて、地元でその資格を取

得することが出来るのであるから、大きな福音であった。

そこでやすは高等師範科新設にそなえるため、四月からさっそく校舎の増改築に取りかかることになった。そして新校舎六教室（三百坪）の増築は、黒石町の相沢組が請け負い、四月二十一日に地鎮祭を行なった。

なお当時の鳩山一郎文部大臣は私立学校の経営が非常に乱れていたことから「インチキ私学整理」を断行、そのため閉鎖、廃校する私立学校は全国的に続出し「私学非常時」といわれたが、その最中に和洋裁縫女学校がこのように飛躍的な発展を続けたことは、教育界において驚異的な出来事として注目された。

敷地千二百坪という女子実業学校としてはまれにみる規模と内容をそなえ、さらに校舎の増改築に着手するというのであるから、まさにその発展ぶりは驚異的といわれたのも当然であった。この年やすは五十三歳である。

工費一万二千元を投じ、昭和八年四月から着工した校舎増改築工事は順調にはかどり、七月末には竣工した。そして十月十四日、創立十周年記念式をかねて盛大な落成式を挙行了した。式場の講堂は来賓、後援会員、同窓生、生徒父兄ら二百名が埋め、矢野県学務部長（知事代理）をはじめつぎつぎに祝辞があった。

この日の喜びを、当時の新聞は、やすの談話としてつぎのように掲げている。

「一般のご高恩に對しまして、十周年を期とし、せめてはと考へ、高等師範科の新設を願ひ出たところ認可を得たので、その設備として今回新築の校舎を完成し、今日の落成式を挙げる事が出来ました。生まれ出てより十周年、大過なくここまで歩みえました学校の跡を眺めます時、また不徳の私が今日までこの重任にたえて来たことを思います時、県、市当局、後援会員、父兄、卒業生及び社会一般のご恩沢によることはもとよりのことですが、一方本校の職員方が一致協力熱と愛とをもつて、十年一日の如く子女の教育に当たられ、全校挙げて家庭的なる和合の発露にあることを、心から喜んでおります。十年の昔をしのび今昔の感交々いたり、万感胸にあふれて感涙にむせぶのみであります」(昭和8・10・14「弘前新聞」)

やすの喜びのほどが想像されるものである。この十年の間には校地、校舎の拡張は十回に及んだが、この新校舎竣工で、校舎建坪(二階とも)七百二十二坪、内教室坪数は三百九十五坪、その他三百二十七坪に成長したのであった。とにかくこの時の増改築によつて校舎は見違えるばかりスマートになった。またこの資金面での協力者である後援会員は青森、弘前両市はじめ津軽各郡下に広がっていた。

当時は県下はもちろん県外にも名が知られ、北海道、秋田、岩手などからも入学する生徒がふえていた。十周年記念式当時調査の生徒の出身都市別では南郡一九五、弘前一〇三、中郡九五、北郡五二、西郡三八、青森一九、東郡一四、下北一三、上北五、三戸一、他府県三六、計五七一名である。



このころには女流教育者としての柴田やすの名は広く知られたっていたが、昭和八年十一月三日の明治節には昭和謝恩会から、女子実業教育に貢献し、女流教育家の模範であるとして表彰を受け、さらに十一月十一日には、帝国教育会から我が国教育界に対し功労特に顕著であるとして功労賞が授けられた。また十一月十八日には弘前教育会が、市の教育界に二十年以上在職した功労者として高山文堂、杉山薫之進、永山源之丞を表彰した。それで和洋裁縫女学校の卒業生たちはこの重なる喜びを祝い、十二月二日に職員一同とともに四先生の表彰を祝う会を催した。

また昭和八年ごろは、満州事変勃発以来第八師団将兵の満州出兵が続いていて、軍都弘前は軍国調にいろどられていた。弘前衛戍病院（のちの陸軍病院）にも多くの傷病兵が入院していたが、和洋裁縫女学校では傷病兵のため慰問運動会をやった。新聞はつぎのように報じている。

「七月十九日午後一時からは待ちこがれた弘前和洋裁縫女学校生徒の慰問運動会だ。院庭にさっそく縄張りの急設グラウンドが設けられ、和洋校からは柴田校長以下職員及び全校生徒総動員で六百名。レコードの拡声器、ヴィオリン、オルガンなど取りそろえて、女生徒の国旗ダンスから幕は開けられた。群がる白衣の勇士、痛む個所も忘れ拍手のあらし、プログラムのなかには勇士の五〇メートル競走もあって、白衣を端折った選手に声援しきり、素晴らしい盛況ぶりであった」（昭和8・7・20「弘前新聞」）

昭和初期になって、この地方でもようやく洋服が普及し、小学校の生徒たちも着物から学童服に変わりつつあった。また一般家庭でも子どもたちに服を着せるものがふえ、家庭の主婦も夏にはア



柴田やすの生母ひさ（晩年）

た。

洋裁速成科は昭和九年一月に認可となったので、その年の四月から生徒を募集した。修業期間六カ月として、年二回募集したのである。なお当時の生徒募集人員は本科、専修科、師範科、専攻科は各五十人、高等師範科三十人、それに洋裁速成科二十人で計二百五十人であった。

この洋裁速成科は、やす自身も教えたが、主として娘の美穂子を当たらせた。東京女子専門学校に学んでいた美穂子は昭和九年三月に卒業したので、やすは卒業と同時に自分の学校に勤めさせ、洋裁と家事を生徒に教えさせたのである。美穂子は在学中から洋裁が得意であったから、女専の校長から卒業後も学校に残って欲しいと強く要望されていた。しかし母やすが洋裁速成科を新設してそれを担当させる意思があることを知っては、母にそむくことはできなかった。

ツパツパと称した簡単な服を着るものが多くなつた。それはたしかに着物に比べて経済的であるが、それでも町のデパートや商店で売っているものは、安いとはいえないのである。そこで時勢の動きに敏感なやすは、こども服や主婦の家庭着などを自分で仕立てるようになれば非常に廉価に安くすることを考え、また生活改善の上からもそれを普及すべきであるとして、新たに洋裁速成科を設置し

美穂子はそれから三年後の昭和十二年一月四日に、当時浪岡町の津軽病院の外科部長で医学士（のち医学博士）長谷川重郎（北海道出身）と結婚した。しかし学校の方はその後も続けて勤めた。なお、美穂子は結婚後安津子と改名したのである。それでこのあとの記事には混乱しないように安津子として書く。

さて、ここでやすの家庭面での変化にふれておく。

当時、やすは夫勇吉と別居し、勇吉は仙台市に住んでいた。だが昭和十一年の秋ごろから病にかかり、その年の十月二十日に弘前で六十二歳で亡くなった。またその翌年の二月二十六日、やすの生母白鳥ひさが、弘前市中瓦ケ町十番地の家で、老衰で亡くなった。八十歳であった。ひさはやすの父今村儀三郎と死別したのち、荒川村の村長白鳥策太郎と再婚したのだが、策太郎が政治家であったところから、ひさも非常に政治に関心をもち、弘前に住むようになってからも、いわゆる政談演説会などがあると欠かさず聞きにいったという。これは晩年近くまでつづき、当時弘前では「白鳥のオバサマと三上のオバサマ」といって、この二人の老婦人が演説会場に一緒に現われるのが評判になったほどであった。さき書いたやすの母の思い出にもあるように、ひさは聡明で気性の強い人だった。血縁の人たちの話によれば、やすの性格はこの母によく似ていたということである。ついでに、ひさが白鳥策太郎に嫁してから生んだ八人の子を記しておく。すなわちこれらの人はやすにとって異父弟妹である。

長女けい（弘前市中瓦ケ町十番地居住、健在）、長男基正（亡）、二女みき（秋元家に嫁し、在米、

健在)、一男秀三郎(亡)、三女はま(青森市棟方家へ嫁す、健在)、四女郁子(菊池家へ嫁す、現柴田女子高校事務長)、三男(早世)、四男武四郎(亡)。なお、四男武四郎は青森師範卒業、弘前高等小学校訓導で、昭和三年から和洋裁縫女学校の講師も兼務していたが昭和六年十月に亡くなった。

当時の弘前市は軍都としていわゆる軍国調にいろどられていたが、昭和十年から十一年にかけて秩父宮殿下が来弘されてからは、ことにその色彩を濃くした。秩父宮は天皇の弟宮で当時陸軍歩兵少佐に昇進と同時に、第八師団管下の第三十一連隊大隊長に転補せられ、昭和十年八月十日に妃殿下同伴で弘前市へ赴任された。そして紺屋町の菊池長之の別邸をご仮邸として十一年十二月七日に退弘されるまで住んだのである。軍籍にある皇族が、地方の師団に転補されるということは異例のことだったので、弘前市民の歓迎ぶりは大変なものであった。

秩父宮ご夫妻はスポーツを愛好された上に、非常に庶民的だったので、市民との接触の機会が多かった。当時の市民の多くは皇室、皇族に対して絶対的な尊敬をはらっていた。余談だが、秩父宮来弘の日取りがきまると、石郷岡文吉弘前市長は、市民に対する論告を発表した。その中の「敬礼に関する件」には「ご勤務のためご往復の節はもちろん、その他ご微行の場合といえども、途中ご乗馬、自動車、ご徒歩にかかわらず、両殿下ご通行の場合は路傍に停止して最敬礼を行うべきこと。ただし御堂筋を横断するが如き不敬なきよう最も注意せられたし」とある。このほか、火災や、伝染病の予防、道路清掃などを呼びかけた。

もともと愛国精神の旺盛なやすが感激して迎えたことはいうまでもない。やすはさっそく殿下の

来弘を記念し、全校生徒奉迎のさいまちまちの服装では困るといので、校服を制定した。裁縫女学校なので和服に決め、本科生は紫モスリン、専修、師範、専攻、高等師範、洋裁速成の各科生は紺モスリンで、いずれも袴の裾には白線一本つけた。新聞に載せた校長談話では「女の礼装となれば高価な紋付きになるので、経済と実用を兼ね、裁ち方もオクミのない元禄袖です。一円六十銭から二円ぐらいで安く出来るものです」という。

また秩父宮妃殿下は女子教育の奨励のため十一年十月十九日に、市内の私立女学校三校合同の生徒成績品展示会においてになつて、やすたちを感激させた。三校とは弘前女学校（ミッシヨン）、和洋裁縫女学校、家政女学校であるが、会場には弘前女学校があてられた。妃殿下はこの時、三校長に親しく会い、女子教育にさらに励むよう言葉をかけた。当時としてはまさに「身に余る光榮」として感涙にむせんのである。

ところで、この年の二月には二・二六事件が起こり翌十二年七月には日華事変が勃発、これからの日本は戦争へ突入していったのである。そして国民は泥沼のような暗い戦争時代に引きずり込まれるのだが、当時何も知らない国民たちは「非常時」という掛け声のもとに物心ともに緊張した生活を送っていた。

愛国婦人会、国防婦人会などの組織も活発な活動を始めた時期で、やすもまた十一年十一月には国防婦人会第三分会長に推された。愛国心の旺盛な彼女が、こういう面でも献身的な活動を続けたことはいうまでもない。

やすの教育方針の一つである「地域社会への奉仕」は、早くから実践され、さきにもふれたように昭和四年から十カ年継続事業として国債償還基金献納、同五年から貧困学童の救援運動、同六年からの敬老会と出征軍人遺家族慰安会開催などが毎年続けられていた。これらの資金は、毎年十月下旬に行なう「市民奉仕特価仕立物週間」の収益によってまかされた。

それがさらに発展して、弘前衛戍病院入院の傷病兵慰問、出征将兵への慰問袋製作奉仕など、いわゆる婦人の「銃後のつとめ」としての奉仕活動を、学校を挙げておこなうようになったのである。やすの学校経営に対する意欲はいよいよさかんで、その構想に基づいて、一歩一歩と堅実に実現していったが、昭和十二年七月には校地に隣接する中瓦ケ町十四番地の土地を購入、さらに同十三年四月には上瓦ケ町十八番地の土地も購入して校地を拡張した。そして十三年四月からタイプライター科（六カ月修了）も特設した。

タイピストは婦人の新しい職業として注目されていたので、やすは率先してその養成のためにこれを設けたのである。またこの時期には、女子の労働着、改良モンペ、魚形靴下型、羽衣ネンネコなどをつぎつぎに考案して特許権を得ている。この女子労働着は昭和十三年十月に岡山県の高梁高等技芸女学校で開かれた家庭博覧会に出品したが、羽衣ネンネコとともに最優等賞となった。女子の戸外作業用に作ったもので、弘前手織地一反で上下ができ、一着一円三十銭ほどで仕立てられるところから非常に普及した。津軽各郡農会では、やすを講師に招いて各部落で講習会を開くなど、たちまち実用化された。

モンペも「柴田式改良モンペ」として特許をとり、戦時中には弘前の女性ほとんどこのモンペをはいたという。時局柄当時の女性はほとんどモンペをはいたが、やすは在来のものに工夫を加え、見た目にも格好がよく、また仕事の能率という点を考慮したものだ。それが評判を呼んで生徒を通じて地域社会にも広く普及した。当時東京の某デパートでは、その反響が素晴らしいことから、柴田式改良モンペの特許権を譲り受けたいと交渉があった。しかし、やすは特許を売れば、生徒にも一般婦人にも作り方を教えることができなくなる、といって聞き入れなかったという。いかにも教育のためには、名利をかえりみない彼女の心情がうかがわれる話である。

このころのやすは女流教育者としてその功績が高く評価され、しばしば表彰を受けた。昭和十三年六月十二日には、青森県教育会から長年にわたり女子中等教育に尽瘁した功労が認められて表彰され、つづいて同月二十五日には弘前市制実施五十周年記念で、教育功労者として市長から表彰された。また昭和十五年は皇紀二千六百年にあたり、教育勅語頒布五十周年にもあたっていたが、十月に東京で行なわれた五十周年記念式典に教育功労者として選ばれて参列、さらに翌十一月には二千六百年奉祝記念式典ならびに奉祝会祝典に、県民代表として参列した。

さて、わが国はこの二千六百年の祝いをさかいとして、このあと暗い戦争時代に突入するのである。すなわち十六年十二月八日、太平洋戦争（当時は大東亜戦争と称した）が勃発したわけだが、緒戦のはなばなしさも、長くは続かず、しだいしだいに戦局は不利におちいつて緊迫化していったのである。

しかし、やすはこの戦時中の十八年に講堂建築という大事業をなしとげている。この年学校は創立二十年を迎えることになったが、前年の十七年六月にその記念事業として計画され、柴田後援会、生徒父兄会などの賛成を得て、八月から着工、十八年十一月に竣工をみたのであった。

この講堂と同時に割烹室、寄宿舎の増改築もおこなったが、講堂は二百三十五坪、割烹室、寄宿舎三百四十五坪で、工費十一万九千円を投じたのである。戦争のさなかにこれだけの建物を建築したのだから大変なものだ。それにしても創立以来二十九年の間に増築、改築、新築と十九回の工事を重ね、まったく一歩一歩、階段を踏んで登るように着実に発展したのであった。

創立二十年記念式ならびに記念講堂落成式は十一月十六日に盛大に挙行された。この時にやすはその感激をつぎのように詠った。

諸人の情けの露にうるほひて文の林のいやしげりゆく

心して築き上げたる講堂は幾年たつともゆるがざらん

しかも創立二十年記念式にさきだつて、十一月三日の明治節には教育功労者として藍綬褒章下賜の名誉に輝いたのであるから、その喜びが一段と大きかった。すでに彼女は六十三歳であったが、その胸に飾られた藍綬褒章は、長い苦闘が報われた喜びを物語るものであった。

昭和十八年には三月一日をもって学校組織を変更、従来の師範科、高等師範科を廃止して、本科



第一部、第二部の他に専攻科第一種、第二種を付設した。その翌年三月一日には第一種専攻科卒業生に青年学校助教諭ならびに、国民学校初等科訓導の無試験検定が許可になった。

青年学校とは、もと青年訓練所と称して、小学校に付設されていたが、昭和十年四月から勅令によって青年学校と改められ、校長は小学校長が兼任していた。十四年からは義務制になり、尋常科卒業生で上級校に進学しないものは、すべて青年学校へ入学することになった。また小学校は十六年四月から国民学校に切り替えられたのである。

このころには各学校とも戦時下の非常時意識が強く叫ばれ、男子の生徒の行なう敬礼は拳手の礼とかわり、教員は戦闘帽に国民服、生徒はカーキ色の制服で軍国色一色となった。女学生も学用品はリュックサックに詰めて背負い、モンペに下駄ばきであった。

国民服は十五年一月、資源愛護と国民経済の上から全国民の服装を統一しようとして、陸軍省と厚生省が主体となって設定したのだが、男の国民服にもなって婦人標準服というものも厚生省から発表された。和洋裁縫女学校では十八年七月から、女の教職員全部がこの標準服を着用した。すでに衣類の自由販売は十七年から禁止となり、すべて点数切符制による極端な消費規制の生活になっていたのである。

十九年九月一日には、いままでの和洋裁縫女学校という名称の「洋」が敵性を意味してよくないと注意を受けたことから、柴田女子実業学校と改称することになった。また十月一日には県知事から看護婦養成所に指定された。戦時体制の強化は、どの学校もすべて戦力につながるように改編さ



グライダーに試乗する柴田やす

れたのだ。

学校はさながら被服工場と化し、縫製班、運搬班、ミシン修理班などと軍隊の下請け作業場となつて、生徒は女子工員とかわらなかつた。また下級生は校庭に畑をつくり、遠く笹森山、小沢の田畑にかよつて食糧増産に励んだ。校庭には防空壕がつくられ、徹底的な待避、防空訓練がおこなわれて、若い乙女らの学園にも超非常時態勢の嵐は容赦なく吹きまくつた。

その間にも出征兵士の歓送迎、慰問袋づくり、勤労奉仕、岩木山神社への雪中行軍や武運長久祈願などが課せられた。この時期にやすは生徒にグライダー操縦の訓練をさせている。この訓練は他校に率先して取り入れたもので、戦時下なので女性としても心得がなくてはならないと考えたのだらう。旧制弘高（現在の文理大）の校庭でグライダーに乗る訓練があつた時、乗る間際になつてみ

んながこわがって尻込みしていたが、やすは率先してグライダーに乗り、あれよ、あれよという声をあとに、空中高く舞い上ったという。その時の写真がいまもあるが、自分で創案したモンペをはき運動帽をかぶった颯爽とした姿で、とても六十を越した人とは見えない元気さである。

当時の生徒たちはつぎのように戦時中の思い出を記している。

「柴田先生は愛国心の強い方で、軍都弘前では戦時中は兵士の出勤、帰還もたびたびのことで、そのつど夜中の二時、三時でも必らず寮生を引率され見送りにかけたものです。二月中旬の寒気の激しい時など、足踏みをしなければ凍りつくので立ってられない時でも、老齢にもかかわらず日の丸の旗を手にされて、戦地におもむく兵隊さんを励まされました。普段はオカユをいただいて、少しでも戦地へ物資を多く送らねばと、寮生とともに欠乏にたえられていました。学校でも兵隊の下ばきなどの縫製作業で忙しく、まるで工場化しましたが、師弟一体となって銃後の奉仕に努めたものです」(斎藤きみ)

「私たちの在学中は、戦争の末期で最も窮迫した時代ですから、国民皆兵の線に添って、入学から卒業まで、ただもう生産、増産に協力でした。針をもつ手にスキ、クワを持ち、最も大切な時に勉強できなかったことを残念に思いますが、二度と味わえぬさまざまな思い出が、今では楽しい語り草となっております。卒業のころは、柴田一郎先生が大学を卒業ほやほやで張り切って就任しました。モンペ姿に国民服の私たちはリュックを背負い、いり豆に、いり米を詰め、小沢にある柴田農園に通うのが日課でした。クワのかつき方が悪いとかで、瓦ケ町より土手町、金上病院の小路を

抜けて、五重塔まで走らせられたこともありました。水をガブガブ飲むAさん、サボリ専門のK子さん、遅刻定期のBさんもいまはみんなよい奥様になったり、各地で婦人部の中堅となつて活躍されている方々も、みんな小沢農園の卒業生なのです。そのころは、汽車に乗つても、木炭バスに乗つても、女と老人とこどもばかり、市内を歩く兵隊さんも標準以下の背丈に、着ている外套がダブダブの状態でした。もちろん秋になつても、学校には焚く薪炭がありません。さいわいに今村誠城先生が岩崎方面の出身ですから、私たち上級生は薪運びにかり出されました。岩崎の中腹にあるお寺に宿泊し、四キロほど離れた奥地に行くのです。道らしい道のないところを黙々と列をなし、丸太を背負つて運んだものでした。こうした日々でしたが、お寺の夕べがまた大変楽しいのです。慰問にかけつけたテリアカ先生こと、大谷先生を中心に爆笑が、夜のふけるのを忘れさせました。生干しの薪で、暗い風呂炊きが居残り者の作業で、涙を流したものでしたが、十二湖の風景、焼山のワラビ狩りなどが、すっかり疲れを忘れさせてくれました。由緒ある海辺とともに、山寺のあの鐘楼の鐘の音は、学生生活の懐しいひとこまとして永久に忘れ去ることがないでしょう」(柴田喜江、黒石市在住)

昭和十九年に入ると戦局はしだいに不利な状況となり、国民の生活も極度の物資欠乏から、暗くみじめなものとなつた。こうした中での学校経営は容易なものではなく、それに何事にも率先垂範という強い信念の持ち主であるやすは、その過労と激務とから、たびたび血圧が高くなつた。やすは常日ごろ健康には留意していたが、元来そんなに丈夫な方ではなかつた。しかし、仕事は

つぎからつぎに彼女を追いかけるので、ゆっくりと休養をとる暇もなかった。そこで毎朝手首の筋を見て、それが黒くなっていると、すぐさま小使に主治医の小野芳甫医師（小野病院長）を迎いにやって、注射をしてもらった。今村誠城はその時分のやすの健康状態について、「ことに六十歳の前後は毎年のように、春先の生徒募集のあととか、秋のバザーのころとかにはきまって相当重い病気にかかりました。何事も全力を注がねば気のすまない性分でしたから、私たちが止めるのもきかずに病後の疲労しきったからだにもかかわらず、式の壇上に立つ時などは、話を聞くことよりも、今に倒れはしまいか、今に倒れはしまいかと、顔色ばかり見つめていたことも二度三度ではありませんでした」といつている。

それでやすの健康を心配した今村夫妻が相談して、十八年三月に敏がそれまで二十年勤めていた県立弘前高女を退職し、妹の安津子とともに、母の学校の仕事を助けることになったのである。しかし、十九年の十二月にやすは肺炎にかかり、一時は重体におちいった。だが、旺盛な気力と周囲の人たちの手厚い看護によって、さいわいに回復した。

昭和二十年に入ると本土に対する空襲は激化し、東京、大阪をはじめ全国の都市がB29の猛攻を受けた。本土決戦が叫ばれ、学校も決戦体制として全学徒を食糧増産、軍需生産、防空、防衛など直接決戦に緊要な仕事に総動員し得る体制をつくることになった。七月二十八日にはB29の大編隊が青森市を襲い、潰滅的大打撃を与えたが、八月に入ると弘前にも連日空襲警報が発令され、市民も覚悟をきめなければならなかった。やすもまたこの最悪の事態に備える決心をしたのである。

八月十五日、ついに終戦となった。生徒たちは農場でクワをふるう手をやめ、また縫製作業のミシンを踏む足をとめて、ラジオの天皇の声に耳を傾け、先生ともども呆然としてなす術を知らなかった。やがて、虚脱のさなかに米軍が進駐してきた。学校は子女の危険をさけてしばらく休校した。長い戦争であった。この間に「和洋の三山先生」といわれた三人の先生もつぎつぎ亡くなっていた。永山源之丞は昭和十五年八月二十七日に七十四歳で亡くなり、高山文堂は翌十六年一月二十七日に九十二歳の高齢で逝去し、杉山燾之進は終戦直前の二十年五月二十三日に、これまた八十二歳の高齢で世を去った。かつて創立十周年のさいに、やすはこの三先生の恩を謝して「三つの山の高きしをりのあればこそ十とせも坂も今日登りけれ」と詠ったが、長い戦争の終わりを待たずに三人ともこの世を去ったことは、彼女の心をいたませたのであった。

余談だが、この間この地方の人びとから「和洋」と「家政」と併称されて、互いにライバルとみられていた小山内もと子経営の私立弘前家政女学校は、昭和十五年に紙漉町の旧富田小学校跡に校舎を移して、いよいよ発展するかにみえたが、その年のうちに校主唐牛敏世に学校をあげて譲渡して弘前を去っていった。そして終戦の翌年二十一年に九州の長男宅で七十歳で亡くなった。

非戦災都市弘前は空襲による被害もなく、市街の変化はほとんどなかった。しかし、やすの学校も長い戦争の間にすっかり疲れていた。物資や食糧は極度に不足し、人心はすさんでいた。校舎の補修も思うにまかせず、ガラスはまだ一般に回らなかつたため、各校とも残っている窓ガラスの盗難が相次いだ。朝起きてみると、昨日までであった窓ガラスが十数枚もなくなっていたりした。こ

れはどこの学校も同じだったから、ガラス一枚ごとにペンキで校名を記して盗難を防いだ。そしてガラスのなくなった窓に板を打ちつけて間に合わせた。

進駐軍の占領管理下にあつては、G・H・Qの発する指令は至上命令である。そのねらいは「民主主義の原理に立つて日本民族を再教育する」ことにあつたので、新しい理念に基づいた教育に関する指令がつきつきと発せられた。それはあまりにあわただしく、一つを理解して消化するいとまもなく、つぎの新しい指令が追いかけてくる始末だった。

やすはこの間に戦後の教育に対する情勢を考え、昭和二十一年にまず財団法人柴田学園を設立して自ら理事長となり、続いて専門学校令による東北女子専門学校を設置して校長となった。これは二十一年五月三十一日に文部大臣の認可を得、生活科、被服科（修業年限三年）を置くことにしたもの。

二十二年三月には「教育基本法」が公布、また五月から「新憲法」が施行され、新しい教育の基本的方向がこれらによって明らかになった。これに関連して、同時に公布をみた「学校教育法」は実際上の運営に関する規定をふくみ、この両法によってまさに画期的というべき六・三・三制が確定づけられた。この学制改革によって柴田中学校が二十二年四月一日認可となったが、二十三年に文部省が示した「高等学校設置基準」によつて、同年四月から新制高校として柴田女子高等学校が発足した。これは普通科、家庭科（以上修業年限三年）に別科（同一年）をおくもので、四月二十日に入学式を挙行した。

こうしたたび重なる変遷の間に、二十二年五月三十一日には柴田学園創立二十五年記念式が行なわれ、やすは新しい学園の構想を心に描いて、着々と準備をすすめたのである。それは旧軍隊の敷地、建物の活用であつた。やすが目をつけたのは旧野砲隊であつた。これは富田町安原六十三番地にあつたが、その敷地一万三百七十二坪と建物一千十二坪を大蔵省から払い下げを受け、二十三年三月から旧兵舎を高等学校の校舎とするために改増築を行ない、内部を教室に使用すべく大修理をしたのである。この時の経費は三百五十万円であつた。私立学校として軍の施設を購入したことは、戦後の私学団体としては最初のことと、その間におけるやすの努力は大変なものであつた。

このころは、終戦後の食糧難と生活の窮迫はどん底で、社会の道義の退廃は目をおおうばかりであり、教師も生徒も最悪の生活状態におかれていた。教科書もノートもザラ紙や再生紙の破れやすい粗末なもので、学用品や文房具などはまったく貴重品だつた。しかし、そうしたなかにあつても新しい時代を迎えた乙女たちの表情には、戦時中には見られなかつた明るさが漂つていた。

また終戦後の弘前における女子教育は画期的な躍進を示し、東北女子専門学校が本県における最初の女子専門学校（師範女子部をのぞく）となつたのに続いて鳴海康伸（鳴海病院長）経営の女子厚生学院も、戦後旧偕行社跡に移転し、二十一年六月に女子厚生専門学校に昇格した。私立弘前女学校は二十一年から聖愛高等女学校と名を改め、新学制の発足とともに聖愛高等学校となつて、二十二年四月から英文専攻科を開設、短期大学への準備をはじめたのである。

昭和二十年九月には三女安津子の夫長谷川重郎が戦地から帰還した。長谷川重郎は戦時中軍医と



して三度応召し、陸軍軍医中尉であった。このころ下白銀町に愛国婦人会弘前支部経営の托児所があったが、終戦後解散することになったので、弘前支部長の三上初子（弁護士三上直吉夫人）は、同会の役員であったやすに、その敷地と建物を譲渡した。やすはさっそく建物を修理して、ここを洋裁科の教室に当てていたが、長谷川重郎の帰還後は長谷川夫妻に権利を譲った。現在の長谷川外科と白銀ドレスメーカー女学院の場所である。

二十三年当時の柴田学園は柴田中学校、柴田高等学校、東北女子専門学校の三つを経営、その生徒総数は一千三百人、教職員六十三人、卒業生は七千四百人に達していた。上瓦ケ町の中学、専門学校の校地は二千二坪、校舎延べ坪数一千二百四十四坪五合、安原の旧野砲隊跡の高等学校校地一万三百七十二坪、校舎一千十二坪となって、その発展ぶりは目をみはらせるものがあつた。

当時は冬期間の暖房として薪ストーブを使っていたが、その薪は夏の間を用意しなければならなかつた。いわゆる流木（ながしぎ）で、人夫を頼んで鋸引きし、さらに小割りにしたが、三つの学校で一冬に使用する量は約百二十棚にのぼるので、校庭は流木の山を築いた。一棚四千二百五十円であつたから、燃料代だけで五十一万円もかかつたという。

ところで安原の旧野砲隊跡に高等学校が開設されたころの思い出を、当時の生徒はつぎのようにいつている。

「私は二十三年三月柴田中学校を卒業、柴田女子高校に進学しました。高校は新学制によつて創設され、野砲兵三大隊跡の校舎で開校されることになりました。四月十日に柴中出身の高校入学者

三百人ばかりが新校舎の清掃に行くことになり、手に手に掃除用具を持って、中学校の前庭に集合しました。校長先生はひときわ高い台に上り、皆さんが新制高校の生徒として勉学されることになりましたのは、何より喜ばしいことです。このたび教頭として東京から飯塚晶山先生をお迎えすることになりましたから、同先生のご指導のもとにいつそう学業に精励して下さい」との紹介がありました。それから新校舎に行きますと、校長先生が総指揮となって、さあ元氣を出して早くキレイにしましょうね」とのお言葉に、わき目もふらず受持ち区域の清掃を終わったのでした。一同校庭に集まった私たちに、細々とした感謝の意を述べられた先生のお顔はいつになく朗らかで、そのまなざしはいつそう照り輝いているように思われました」（葛西節、東北女子短大卒）

また当時柴田中学校のPTA会長だった樋口義逸はつぎのように回想を記している。（柴田やす女史追悼録）から）

「ある日柴田学園で会合のあった時のこと、私は早朝学園の玄関に立った。普通の学校の玄関とは異って一種異様な感じに打たれた。というのは、心暖かい家庭的ふんいきがみなぎっている感じなのである。訪問を告げ、校舎に上がり、講堂に歩を進めた時、私はある一点に釘付けにされてしまった。それは背の低い婆さんが長柄のホーキを持って、一心に掃除をしているのである。『学校の小使さんかな』と思いつつ遠くから眺めていた。始鈴にうながされて会場に向った私は第二の驚きの声をあげずにはいられなかった。あの時の婆さんが、先方に紋付き姿に威儀を正して端然と坐っているのである。居合わせた人にお聞きして、あの方が柴田学園の生みの親である柴田先生である



昭和24年1月5日、市内校長会の人びとと古稀のお祝いに招いたさい。中央が柴田やす

と知り、その人格の偉大さにただただ感じ入るとともに、わからなかった自分の不徳を深く恥じた。一校の教育行政者であるばかりでなく、偉大な慈母であると思った」

昭和二十四年の元旦には、やすは古稀の寿を迎えた。明治十四年一月元旦生まれなのである。誕生祝いは元旦とぶつかるので、公人としての彼女は何かと多忙なところから、毎年一月五日に誕生日を祝っていた。その一月五日につきのようなことがあったので紹介しておく。岩村芳麿（柴田中学校教諭、故人）の回顧の記事である。（「柴田やす女史追悼録」から）

「この日、午前九時から弘前市内の公私立小・中学校、高等学校の校長会の常会が、当番校である柴田中学校の校長室で開催されたが、同十一時ごろ終了したので一同が辞去しようとする時、柴田校長が「今日は私の誕生祝いですが、ことしは

ちようど古稀の寿を迎えましたので、何の設けもございませんが、あちらで一献差し上げたい」とおっしゃって、一同を賀宴に招ぜられた。突然のことではあつたが、せつかくのご厚意でもあり、めでたい古稀の祝賀でもありますので、ご懇情にあまえて一同は礼法室での祝宴に列した。大広間には、今日のこの佳き日を迎えられた先生をはじめ、ご家族、ご近親ならびに青森、八戸両市の私立学校長や、柴田学園の後援者、教職員、同窓会の幹部の方々など、数十名がところ狭いまでに着席しておられた。誠に盛大な賀宴であつた。正午、古稀を迎えられたとも思えぬほどの若々しくカクシヤクとした柴田先生には、紋服姿も優雅に、ていちようなご挨拶をのべられたが、これにこたえて、市内校長会を代表して須郷弘前高校長、私立学校代表として小田聖愛校長、小学校長を代表して佐々木一大校長その他から、柴田先生の私学の権威として多年地方教育に尽瘁せられた偉大な業績を称揚する賛辞と、古稀の寿を迎えられた祝辞とがこもこも述べられ、まことに和やかな歓喜に満ちた盛宴であつた。宴たけなわの時に、ご令嬢今村敏、長谷川安津子の両先生から、今日のご祝儀にと、目もさめるような真紅の頭巾と胴着と厚い座布団とがうやうやしく老先生に贈られた。そしてさらに両先生の手によつて着服せられたが、この時の両先生が老先生を優しくいたわり仕えるその心遣りの深く、こまやかだつたことは、はたで見る目にも誠に美しく、麗わしく、じつに涙ぐまれるほどの母子の情愛にみちみちた情景であつた。赤い頭巾に、赤い胴着をめされた老先生は、いと喜ばしげにいそいそと自ら銚子をとつて席を一巡せられた。この劇的な豪華な絵巻物の展開は、なみいる客人に深い深い感銘を与えてくれた」

ところで、やすの学園発展の構想はさらにとどまることになかった。それは新たに栄養学校と、短大をつくりあげることである。栄養学校は新しい時代の到来にそなえて、栄養士の養成に着眼したのである。また「教育基本法」は教育の機会均等のたてまえに従い、従来の国立大学のほか、すべての高等・専門学校を新制大学に切りかえ、大学の地方普及を目的としていたが、やすはいちはやく東北女子専門学校を短大にすべく、大学設置基準に合致するよう内部の充実をはかっていたのである。

東北栄養学校は二十四年二月二十七日、各種学校として設置が認可されたが、十月には栄養士養成施設として厚生大臣の指定を受け、翌二十五年三月から卒業生に対し栄養士の免許証が下付された。

一方、二十四年三月に専門学校の校則を変更、修業年限を二年とし、別に家庭科（修業年限一年）を増設、同年三月以後の卒業生に限り生活科には「家政科家政及び保健」、被服科には「家政科被服」の中学校、高等女学校教員無試験検定許可規定により文部大臣より許可となった。

このころ、すなわち二十四年四月に学校教育法の一部改正法が国会を通過して、四年制の新制大学のほかに、必要に応じて二年制（または三年制）の短期大学を設置することがきめられた。旧学校教育法によれば新制大学の修業年限は原則として四年になっているが、わが国の実情では従来の専門学校に匹敵する職業教育を望むものや、特に女子などにとって、この修業年限ではどうしても長すぎるきらいがあったので、短期大学が考えられたのである。

これによつて、学生は短期間に社会人として必要な職業教育を身につけることができ、また教育費の経済的負担も軽くなるわけだった。短期大学の学課の中には、被服、生活、社会、厚生、保育、酪農、園芸、貿易、写真、造園、服装など、実生活と密接な課目がふくまれていることが、大きな特色であった。また短期大学は四年制大学に併置新設することができるほか、旧高专校の昇格、各種学校でも設置基準に合致するものは認めることになった。

東北女子専門学校もその基準に該当することになったので、やすは大いに喜び、さっそくその準備をすすめることになった。これが認可になれば、彼女の一生の願いである大学が実現するのである。当時、全国から新しく短大設置を申請したのは百八十六校であった。弘前聖愛女子高校もその中の一つで、東北女専とともに弘前から二つの短大設置の希望校がでたわけだ。しかも二つの学校は、道路一本を隔てて背中合わせというのだから、不思議なめぐりあわせだった。

聖愛（戦前の弘前女学校）はもともと県下で一番古い歴史をもつ女学校で、明治十九年に創設され、ミッシヨン・スクールとして独自の女子教育をおこなってきた。戦後もいちはやく、米国のメソジスト教伝道団から復興資金を受けるなど、経営的に恵まれていた。それに比べてやすの柴田学園は、和洋裁縫女学校として開校以来三十年にみたない上に、まさに徒手空拳、女一人の腕で築きあげたもので、何らの強力なバックもないのである。たのみは実質的な内容評価ということだけだ。学校経営には強い信念と抱負を持つやすではあったが、はたして認可になるかどうかは、はかり知るすべがない。そのことを思えばいちまつの不安がただようのであった。



焼失以前の学園本部と職員。前列左から杉山燾之進、柴田やす、  
後列左から小野豊作、今村誠城、成田敏夫

二十四年七月十八日には、弘前大学が開学して  
いた。青森医専、弘前医大、官立弘高、青森師範、  
青年師範の五校を一丸とした総合大学だが、これ  
が誕生するまでには、さまざまないきさつがあつ  
たし、その後も財政難から施設が遅々として進ま  
ず、このままでは短大に格下げされるなどと、当  
時はうわさされていた。そうしたことが耳に入る  
と、さすがのやすも心配だった。

一方、文部省に設けられた大学設置審議会は、  
その年の九月から、わが国初の短大の審査に当た  
っていたが、年を越して二十五年三月九日の最終  
審査委員会で、申請百八十六校のうち百十三校を、  
二十五年から開設認可することに決定した。東  
北女専、聖愛の両校ともに通過したのである。正  
式決定の通知は三月十二日に電報で伝えられた。

この日、やすは体の加減が悪く床に伏していた。  
だが「ニンカケツテイ」の電報が入ると、ただち

に床の上に正座して、電報を受けとり、それを幾度も押しただきながら涙を流した。歓喜と感激の涙であった。ついに一生の悲願が実現したのである。こうして東北女子短期大学が誕生し、柴田学園は中学、高校、栄養学校、専門学校と五つの学校をもつ総合学園として新発足することになった。長い苦節の歲月であったが、その不撓不屈の精神が大きな光輝をもたらしたのだった。

新しく生まれた東北女子短期大学は、被服科（修業年限二年）、別科（修業年限一年）で、定員各四十名、被服科の卒業生は準学士の資格を得るとともに、中学校・高校の被服科教員免許状が与えられ、またさらに進学する場合には官公立私立大学の三学年に入学できるのであった。

講座は一般教養、専門とも計二十講座からなり、教授は斎藤馨、今村敏、飯塚晶山の三名、助教授松木侃、守屋磐村、栗林一衛、水梨サエ子の四名、講師木下伊智、松木明、中村豊弥、中泉哲俊、小山内時雄、支倉幸雄、寺田清、磯野四六、大津運司郎、霞信三郎、近藤元、石崎宜雄、横島直道、長谷川安津子、熊谷良三、盛忠七、木村良三、黒滝みゑの十八名で、講師の大半は弘大在職教官であった。学長はもちろん柴田やすである。

第一回入学生の募集も順調に進んで、五月五日に入学式を挙行、開学式は五月十四日と決定した。この日は「母の日」にあたっていて、女子の大学の開学式にもっともふさわしい日であったため選んだのである。弘前公園の観桜会もすんで、木々の緑が美しい時節である。

この晴れの日こそなえて、準備万端とどこおりなく整い、やすの心は明るくはずんでいた。早朝に起きたやすはいつものように神棚を拝み、準備のために詰めかけていた職員たちや寮生といっし



よに納豆で軽い朝食をとった。それから身仕度にとりかかった。女教員の一人が着付けを手伝いにゆくと「今日のはめでたい日だから小使さんに白足袋を買わせておいて下さい」といった。下着から白足袋まで、全部新しいものを身につけたのである。また晴れの式場で読む式辞は、前日のうちに異父妹の菊池郁子に清書を頼んだものだった。菊池は戦時中東京の白木屋の人事係として勤めていたが、疎開して米沢市にいたところ、やすは身寄りの話相手も少なくなつたから弘前に来るようにと、亡くなる一カ月ほど前に呼んで、学園の事務を手伝ってもらつていたのである。

上瓦ケ町の柴田学園本部は、内外ともくまなく清掃され、校門には日の丸が高くひるがえつて、学内は喜びの気分にながらなっていた。やすはいつもと変わりなくこまごまと指示を与えていたが、八時ころには今日の式辞のあとで披露する歌を二首つくつて、それを清書した。その間に長谷川重郎がきて「安津子がまだ回復してないので、今日の式には出られないで残念がつています」と告げると、「早くよくなつて学校へ来るように伝えてけへやあ」といった。この時分、安津子は病氣のため長らく床についていたのだった。

定刻午前十時、鳴りひびく電鈴を合図に、学生及び生徒代表、職員、同窓会員、大学教育振興会員、来賓の順で式場の講堂に入った。満場肅然としたなかにピアノの一弾が響きわたり、約千名の人びとがいっせいに起立、開式の辞について国歌が合唱された。これにつづいて柴田学長の式辞である。

黒紋服の盛装に、輝く胸の藍綬褒賞と大輪の白バラ、帯の左脇に扇子をさし、黒の袴に白足袋と

いう姿で、壇上に立った彼女は、静かに式辞をくりひろげ、落ちついたゆるやかな口調で読みすすんだ。

「今日の盛典を迎えまして、私は今さらながら二十八年前浅学非才の身をもって、和洋裁縫女学校を創設いたしました当時、柴田後援会のご同情あるご援助を追想し、感慨無量なるものがございます。…じつに被服科をもつ大学は、全国短期大学百四十九校中、わずかに十数校にすぎないのではありませんが、本学はさらに北奥六県唯一のもので、その地域的要請に鑑み、きわめて重要性を有するものと確信いたしております…」

ここまで読みつづけ、これから在学生に一言ふれようとしたとたん、感極まって言葉が絶えたかと思うまもなく、静かに花が崩れ散るように壇上に倒れた。正面の大テーブルを前に立っていたのに、忽然と姿が見えなくなったのだ。驚いた今村敏、齋藤馨教授らは壇上にかげのぼって、抱きかかえ、ただちに校長住宅の居室に移した。講堂の時計は午前十一時をさそうとしていた。

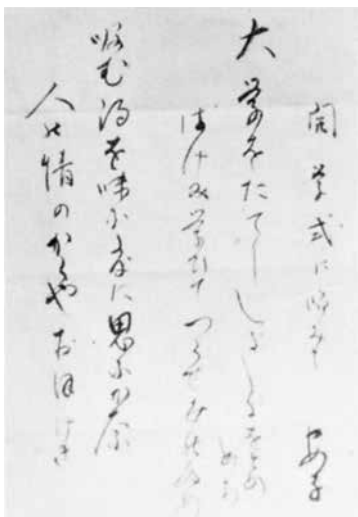
この劇的な一瞬、式場には沈痛と不安のいりまじった空気がみなぎり、人びとの顔は憂色にくもった。だが式辞の朗読は齋藤馨教授によって続けられ、終わって来賓の祝辞及び祝電の披露があり、正午に式が閉じられた。

式場から講堂横手の学長住宅に移され、参列者の一人である小野定男博士がすぐかけつけて脈をとったがやすはすでにことされていた。小野博士は「心臓麻痺です。ご臨終です…」と沈痛な面持ちで宣告した。午前十一時十分、やすの脈搏は止まったのである。

この時、敏は斎藤教授に「先生、どうぞ母の代わりに式辞の朗読をつづけてやって下さい。母の遺志です。ここは私たちにまかせて、早く式場にいつて下さい」と頼んだ。急を聞いてかけつけた長谷川重郎博士が、ただちに人工呼吸をほどこしたが、それもついにむなしかった。

緊急協議の結果、開学式に引き続いて開かれる祝賀会は、予定どおりおこなうこととし、これが無事終了するまでは、特に危篤状態として面会を謝絶、喪の発表を秘すことにした。

祝賀会では、来賓がこもごも立って激励と祝福のことばがのべられ、また異口同音柴田学長の回復を祈ることばがつづけられた。参列者の誰もがその死を知らなかったのである。祝宴ははなやかにつづけられ、午後六時、「柴田学園万歳、東北女子短期大学万歳」と高らかに唱和する万歳の声の



だ詠して題とてみ臨に式開  
柴田学長の歌

うちに、意義深い開学記念の祝宴が盛大に終わった。

やすの枕頭に集まっていた近親者は、中庭を隔てた講堂から伝わってくるこの万歳の声を聞いて、いずれも暗然とした。娘の敏は「せめてあの万歳の声を聞かせたかった」というなり、たまりかねたように母の胸に泣き伏した。

やすのふところには、今朝詠んだ歌二首

が清書しておさめられていた。式辞を読み終えたあと、壇上で披露するつもりであったのだ。

大学を建てししるしにとめどち励み学びてつくせ世のため

汲む酒を味はふたびに思ふかな人の情のかくやおほけき

前のは学生に、後のは後援者たちに対して心をこめて詠んだものであった。そしてこの歌二首が辞世となり、また絶筆となったのである。今村敏はその時の光景をつぎのように伝えている。

「あの式辞の『その間学園のためによせられました深厚なるご支援、ご同情はただただ名伏しがたい感銘をもって、私の胸によみがえってまいります。じつに過去二十八年は私にとって苦闘とともに感謝の歴史でございました』と、ここまで読み続けた時、ちよつと言葉が切れました。恐らく感極まって心で泣いている母の心境が、私にはよくわかるのでした。幾山河を越えてきた母の心境を思い、私もまた目頭があつくなるのを覚えるのでございました。が、また読み続けた声にはほとんど何の乱れも感じられないかのように、落ちついたものでしたのに、もう一度声がとぎれたと思う瞬間、静かに静かに大きなテーブルの蔭に、姿をかくしてしまつたのでした。夢中で駆け上つた私の腕に抱かれた母は、盛装して微笑をたたえ、気高いまでに立派な姿で、横たわっているのです。深い信仰からでた感謝と感激の境地において、教育者として一生の幕を閉じた満足そうな母の

臨終は、子としてはせめてもの慰めではございましたけれど、ただひた泣きに嘆いてはいられない混乱が、つぎに待ちうけておりました。学園将来の発展の重大な危機に立ち、私は母の霊の加護を信じて、その判断に誤りなかれと願うのでした」

当時の柴田学園は、中学校、高校、それに栄養学校、専門学校、短大の生徒・学生一千三百名をかかえ、それらの学校の教職員七十余名という大世帯で、やすが全校長、大学長、また理事長として、経営いっさいをきりまわしていた。あとに残されたものとしては、大変な責任を負わねばならなかったのである。

柴田やす学長逝去の報が伝わると、翌五月十五日の地方新聞、十六日の東京各新聞の地方版はいっせいに報道するとともに、数日にわたってその業績、遺徳をたたえた記事を掲載した。また一般の人たちもその劇的な死が話題となり、「教育者の最期として立派な死所を得た人だ。惜しい人だった」と悼んだ。

葬儀は学園葬とすることに決定し、日取りは五月二十日午前十時から、上瓦ケ町の学園本部講堂で仏式によっておこなうことになった。葬儀委員長は短大主任教授齋藤馨ときまった。

葬儀の日、広い祭場の両側は各方面から贈られた生花、花輪で埋めつくされ、正面の壇上に柩が安置されたが、その場所はわずか数日前に式辞を読みながら故人が倒れたところなので、人びとは涙を新たにした。黒いリボンに飾られた写真の前には「藍功院殿順誉妙安柴舟善大姉」の位牌がおかれた。

全学園一千三百名の学生・生徒が歌う校歌は、哀愁の旋律となって祭場のそとに流れた。つづいて増上寺大僧正、県知事、弘前大学長、弘前市長、県教委委員長、同教育長、県立高校長代表、私学協会会長、旧柴田後援会長、PTA代表、柴田学園教職員代表、同窓会代表、学生生徒代表の弔辞があり、また文部、厚生両省をはじめ二百余の弔電披露があるなど、弘前市でもまれな盛儀であった。

数多くの弔辞のなかでも、ことに人びとの胸を打ったのは学生生徒たちのもので、それは母を慕うこどものように、飾らない真心がこめられていた。

「校長先生は、私たちの健康を常にお心にかけておられ、ちょっとした病気でも、早くなおして欲しいと、わざわざお見舞い下され、愛情をこめた強い力を与えて下さいました。家を離れ、恋しい親のひざもとを遠ざかっている私たちは、校長先生のこの温い愛情に抱かれながら、泉寮の楽園に平和な幸福な日常を過して来たのでした。それにもかかわらず、いたらぬ私たちは校長先生に対して、一日たりともご安心していただけるようなことのできなかつた浅はかさを思うとき、今さらながら後悔の念で胸いっぱいになります。校長先生どうぞおゆるし下さい。ここにもろ手をつけてご霊前におわびいたします……」

最後に弔辞をのべたこの泉寮（寄宿舎）の生徒代表河島照代の言葉を聞くと、参列者の中には声をあげて泣く人すらあった。

式後、ただちにピアノで、シヨパンの「葬送行進曲」が奏でられ、参列者全員起立黙禱のなかを、



柴田家の遺族と親戚の人びと。左から斎藤きく、長谷川安津子、長谷川重郎（抱いているのは長女陽子）、今村敏、柴田一郎、今村誠城、今村孝、白鳥けい、菊池郁子

柩は祭場を出て霊柩車に乗せられて、新寺町西福寺墓地に向かった。一千三百の教え子の半ばは、校庭から校門外まで整列、半ばは先行して墓地に整列し、永遠の別離を惜しんだのである。

ところで、大正九年四月に話をさかのぼらせよう。私立女子裁縫実践学会という名称を改め、私立柴田和洋裁縫女学校として、真新しい看板をかかげた開校式の朝のことである。さきにもちよつとふれておいたように、この朝早く起きたやすは、玄関前のわずかばかりの庭を竹ポーキで清掃していたところ、庭の片隅に一本の小さな木の苗を見つけた。それはいかにも可憐であった。

やすは思わずそこにしやがみこんで、庭の土をポーキで寄せてやり、細竹の支柱をしてやった。開校式を迎える朝に、これを見つけたことが心を打ち、やすは思わず、「お前と私は今日から一緒に出発しよう。お前も私と一緒に伸びておくれ。私

もがんばるから、お前も枯れたりしないでどんどん伸びておくれ……」と心の中で話しかけた。

それからの毎朝、庭を掃くたびに水をかけてやり、この若木の成長をたのしみにした。この木がニワウルシであることはあとでわかったが、ニワウルシは約束を守るようにすくすくと伸びていった。またこの木の成長とともに学校も一歩、一歩と発展していった。それは暗い戦争時代を経過し、戦後の昭和二十五年当時で、十三メートルもの高さになっていた。そして柴田学園本部正門右手にあるこの木は、同校の発展のシンボルとなり、またやすにとつては記念樹となっていたのである。葬送の日、晴れた五月の空にも時折り薄雲が陽の光をさえぎることもあったが、新緑のニワウルシはかすかに葉をそよがして、あたかもこの柩を見送るようであった。

ニワウルシについて、今村誠城（現柴田学園事務局長）は当時をしるので、つぎのように語っている。

「私が学校に来たのは昭和三年一月で、当時この木があつたかどうかわからなかった。しかし、まもなく文部省の認可を受けて中等学校に昇格し、年とともに発展してゆくにつれて、この木の存在が私どもの心の中に一種の神秘的なつながりを持った。地上に柱を立てたように真直ぐに伸び、高くあがったところから、急に末広がりに枝を四方に張って、見るから若々しくぐんぐん伸びて、ぐんぐん太ってゆく。この木の成長のように学校もまたどんどん発展していった。この木の下を通って、生徒や先生が帰ってしまった静かな夕映えに、母と二人で学校経営の方針などを語り合いながら、この木を見上げては言葉はなくとも、希望と感謝の念で、三位一体の心境に打たれたもので



す。母は「もうこれでよい、もうこれが最後だ」と、いいながらも、とどまるところを知らなかった。わずかに百七十坪の校地から、一万四百坪の大校地（筆者注Ⅱ短大開校当時）に広め、裁縫の私塾から大学にまで推し進めて、中学校、高等学校、専門学校、短大と栄養学校をふくむ五校の大学園をつくり上げ、自身もまた小学教員の資格から大学長にまでなった。母の一生の精魂を注ぎ尽くしたとしても、あまりにも多過ぎる偉業をなしたげたものです。母は非常に信心深く、常に人の心と結びつき、また自然を愛しました。そして永久に夢を見ることのできる人でした。その偉業も、母にとつては偶然ではなく、自然であつたと思います。母が亡くなったころには見上げるほどの大木になつていたが、どうもこの木が母の心をあおりたてていたような気がしてなりません。ニワウルシは母も神樹と信じていました」

さて、やすの死後、六月には松野伝（明治二十八年生、昭和三十三年没）を短大学長に迎え、専門学校、栄養学校、高等学校、中学校の各校長を兼ねた。松野は青森県副知事、農学博士で、やすが生前から短大学長として招きたい意向があつた人である。

また、二十六年二月には財団法人柴田学園を学校法人柴田学園に改組し、今村敏が理事長に選任され、亡き母に代わつて学園経営のいっさいに当たつた。二十七年には創立三十年記念式を挙行し、三十年三月に松野学長が弘前市長選挙に立候補するため辞任したので、理事長今村敏が三代目の短大学長として就任、高等学校長、中学校長を兼ねた。

しかし、三十五年五月十三日、短大開学十周年の記念式典をあげる前日に不慮の火災のため、上

瓦ケ町の短大、栄養学校、中学校の校舎を焼失、一億数千万円にのぼる損害を受けた。だがこの苦境にもめげずこれを持ち越え、わずか三年目の三十八年には見事に復興して、鉄筋四階建ての新校舎で創立四十周年の記念式典をあげた。

こうして柴田学園はその後も順調な発展を続け、四十四年四月から東北女子大学が開校した。家政学部だけの四年制だが、仙台以北でただ一つの女子大として今後の発展が期待されている。初代学長は佐藤熙（前弘前大学長）である。

柴田学園（理事長今村敏）の現況は、短大、栄養専門学校（上瓦ケ町）、女子大、高校（豊原）、幼稚園（在府町）、学園総合グラウンド（取上西田）、その他厚生施設用地をふくめ、校地総面積約八万二千平方メートル、在校生は女子大、短大、栄養専門学校、高校、幼稚園をふくめ二千五百人、そして大正十二年以降の卒業生の数は約三万人に及んでいる。

なお、柴田やすを記念するために昭和二十九年七月十四日に、上瓦ケ町の校庭の一角に歌碑が建立されたが、これには短大開学式の当日、式場で披露すべく詠んだ「大学を建てししるしにをとめどち励み学びて尽くせ世のため」の歌が刻まれている。この歌碑は、ニワウルシの木とともに、柴田学園の発展を今後も末長く見守りつつけることであろう。

付記。この稿脱稿直後の昭和四十五年二月五日に柴田やす女史の長男柴田一郎氏（東北女子短期大学助教授、柴田女子高校教頭）が急逝された。つつしんで哀悼の意を表する。



## あとがき

建学の精神は、私学の魂である。柴田学園は学祖柴田やす女史が、徒手空拳を揮って建設し、発展をみたものであるが、こうした私学の場合、「私はこのような信念に基づいて確かに子女をお預りし教育します」という教育的信念の吐露実践に対する、社会的賛同や承認以外に、その存続を保証する条件は存在しない。その意味では、学園の発展それ自体「建学の精神」の客観的表現に他ならないと解することもできよう。

現在学園は、東北女子大学、東北女子短期大学、東北栄養専門学校、柴田女子高等学校、柴田幼稚園に東北コンピュータ専門学校を加え、六つの教育施設を擁するに至っているが、その源は大正十二年柴田やす女史によって創設された弘前和洋裁縫女学校に発する。以来六十余年、追々発展をとげて今日の大をなすに至った。いま発祥の地に、短大校舎増改築の落成式を挙行するに当り、この学園の礎を築き上げた柴田やす女史の創立から短大開学に至るまでの奮闘と発展の跡をたどり、来り学ぶ人々の学風自覚の糧とし、学園将来の使命継承の道標としたいと思う。

本書は陸奥新報社発刊の船水清氏著、『ここに人ありき』第三卷（昭和四十五年出版）に収録の「柴田やす」伝の復刻である。発刊当時から、女史の波瀾に富んだ足跡と私学振興の業績を、資料にもとづき客観的に記述した好著として定評があった。しかし現在は絶版で、容易に入手し難くなったので、今回の記念にせひとも復刻したいと思ひ、著者並びに陸奥新報社にお許しを願ったところ、

幸いにご快諾、ご承認をいただいた。ご好意に対し心から御礼を申し上げたい。

その際著者船水清氏から、本書中の写真原版は、すべて弘前市立図書館に寄託し、現に同館の五十嵐奉仕係長が保管に当たっている旨のご教示があった。ここに関係各位のご高配に対し、重ねて深甚の感謝を表し、復刻の喜びと致したい。

昭和六十一年三月十九日

学校法人 柴田学園

理事長 今村 城太郎

なお本書成立後の学園の歩みを略記させていただきます。

学校法人 柴田学園

追記

- 昭和四七・七 柴田女子高等学校木造二階建校舎焼失  
四八・四 柴田女子高等学校鉄筋コンクリート三階建新校舎落成  
四八・六 創立五十周年記念式典挙行  
四九・一 東北女子大学児童学科増設認可  
四九・一 事務局長今村誠城産業教育功労者表彰  
四九・一 理事長今村敏勲三等瑞宝章授与  
五一・一二 理事長今村敏卒、特旨をもって正五位に叙せらる。  
五一・一二 弘前大学教育振興会長国立病院名誉院長中村豊弥理事長就任  
五四・一 柴田幼稚園清原の新園舎へ移転  
五四・三 東北女子大学学生寮新築落成  
五五・九 理事長中村豊弥勇退（常勤理事今村城太郎これを継ぐ）  
五六・一 東北女子短期大学保育科定員五十名を百名に増員認可  
五八・九 創立六十周年記念式典挙行  
五九・四 東北コンピュータ専門学校設立  
五九・一二 東北女子大学家政学専攻科設置認可  
六一・三 東北女子短期大学新校舎落成式挙行

- 六一・四 東北コンピュータ専門学校情報処理本科（二年課程）増設
- 六一・一二 東北女子大学児童学科定員六十名を期限付二十名増員認可
- 六一・二 弘前経理専門学校との合併に伴い設置者変更認可
- 六一・四 東北コンピュータ専門学校坂本町の独立校舎へ移転
- 六一・八 柴田女子高等学校にコンピュータ実習用端末機四十二台導入
- 六一・一〇 東北コンピュータ専門学校にホストコンピュータ設置
- 六一・一二 東北女子大学にアパレル支援コンピュータ（CAD）システムを導入
- 六三・一 東北女子大学新校舎竣工式並びに落成記念式典挙行
- 六三・四 柴田女子高等学校普通科に情報処理コースを新設
- 六三・一〇 東北女子大学にコンピュータ実習用端末機四十三台導入
- 平成 元・四 東北女子短期大学にコンピュータ実習用端末機三十七台導入
- 二・三 東北女子大学専攻科家政学専攻に高等学校教諭・中学校教諭専修免許状、児童学専攻に小学校教諭・幼稚園教諭専修免許状授与資格認定
- 二・四 東北女子大学にユカパターニアパレルキャドシステム三基を導入
- 二・一二 東北女子大学児童学科定員八十名を期限付四十名増員認可
- 三・二 東北女子短期大学生活科定員百五十名を期限付五十名増員認可
- 三・四 柴田幼稚園園舎増築落成式を挙行
- 三・四 東北女子短期大学生活科に医療秘書コースを新設
- 三・四 東北女子短期大学にコンピュータ実習用端末機五十一台追加導入

- 三・四 柴田女子高等学校保育科の募集を停止し、秘書情報科を新設
- 四・四 東北女子短期大学専攻科保育専攻認可
- 四・九 柴田女子高等学校保育科を廃止する。
- 四・一二 昭和四十二年、今村敏理事長によって建設された学園山の家が「ヴィラ柴田」として再築される。
- 四・一二 名誉事務局長今村誠城逝去
- 五・二 東北女子短期大学にユカパターニアパレルキヤドシステム二基を
- 五・三 東北女子大学にユカパターニアパレルキヤドシステム二基を導入
- 五・三 東北女子短期大学寄宿舎泉寮解体
- 五・四 創立七十周年記念式典挙行
- 五・四 東北女子短期大学コンピュータ実習用端末機五十台更新
- 五・四 柴田女子高等学校に第二コンピュータ実習室を加え、実習用端末機五十台導入
- 五・四 柴田女子短期大学寄宿舎秀芝寮新築落成
- 六・三 柴田女子高等学校普通科に中国語選択コースを設ける。
- 六・九 東北コンピュータ専門学校、通産省より情報化人材育成学科としての認定を受ける。
- 六・十二 東北女子大学児童学科および東北女子短期大学生活科の臨時定員増期間延長認可
- 七・十二 理事長今村城太郎著「いじめの根源を問う」を出版
- 八・三 東北女子大学コンピュータ実習用端末機五十台更新



八・一〇 東北コンピュータ専門学校、通産省より情報化人材育成学科として、二期連続認定を受ける。

九・一 学園総合グラウンドの管理棟を改築。

九・二 東北女子大学ユカパターニアパレルキヤドシステム七基更新。

九・一 東北女子大学ユカパターニアシステムCGシステム七基導入

一〇・二 東北女子短期大学寄宿舎植田寮解体

一〇・二 東北女子短期大学第二体育館解体

一〇・四 東北女子短期大学寄宿舎実践寮及び弘前経理専門学校木造校舎解体

一〇・六 東北女子大学厚生補導施設取得

一〇・八 柴田女子高等学校木造校舎一部解体

一〇・一 東北コンピュータ専門学校、通産省より情報化人材育成学科として三期連続認定を受ける。

一〇・一二 東北女子短期大学被服科定員三十五名を二十名に変更

一一・三 柴田女子高等学校体育館新築竣工式挙行

一一・三 専門学校統合校舎新築竣工式挙行

一一・一〇 東北女子大学家政学部児童学科の臨時定員増期間延長認可

平成一二年 度 五 四 人 平成一三 年度 四 八 人 平成一四 年度 四 二 人

平成一五 年度 三 六 人 平成一六 年度 三 〇 人

理事長今村城太郎著『国破れて自虐あり―論集「独立の鎖」―』を出版

- 一一・三 東北女子短期大学コンピュータ実習用端末機五一台更新
- 一一・四 弘前経理専門学校、東北経理専門学校に校名変更
- 一一・四 東北経理専門学校コンピュータ実習用端末機六台更新
- 一一・五 柴田幼稚園、満三歳児の年度途中受け入れを始める
- 一一・七 東北女子短期大学、訪問介護員（二級）養成研修校として指定を受ける
- 一一・一〇 東北コンピュータ専門学校、通産省より情報化人材育成学科として、四期連続認定を受ける
- 一二・一二 東北女子大学家政学部家政学科に高一種免許状（情報）授与資格認定
- 一三・二 理事長今村城太郎著『教育と環境』を出版
- 一四・四 東北女子短期大学コンピュータ実習用端末機五一台更新
- 一五・四 柴田女子高等学校「秘書情報科」を「情報科」に学科名変更
- 一五・四 柴田幼稚園に桜ヶ丘保育園分園併設
- 一五・五 創立八十周年記念式典挙行
- 一七・一 東北女子大学ユカアンドアルファキヤドシテム七基更新
- 一七・四 東北女子短期大学被服科定員二十名を一五名に変更
- 一七・四 東北女子大学家政学部家政学科・東北女子短期大学生活科に栄養教諭免許課程設置
- 一七・四 柴田幼稚園・桜ヶ丘保育園分園に総合施設モデル事業を開設
- 一七・五 東北女子大学コンピュータ実習用端末機五一台更新

- 一七・一〇 総合施設モデル事業の一環として柴田幼稚園・桜ヶ丘保育園分園に親子教室「ひよこクラブ」を開設
- 一八・四 東北女子大学長・東北女子短期大学長、東北栄養専門学校長・東北コンピュータ専門学校長・東北経理専門学校長今村城太郎退任
- 一八・四 東北女子大学家政学部長小澤 薫、東北女子大学長に就任
- 一八・四 理事河西達夫、東北女子短期大学長・東北栄養専門学校長・東北コンピュータ専門学校長・東北経理専門学校長に就任
- 一八・四 学校法人柴田学園理事長今村城太郎退任
- 一八・四 理事柴田誠造、理事長に就任
- 一八・四 前理事長今村城太郎逝去、柴田学園葬を東北女子短期大学体育館で行う
- 一八・五 東北女子大学ユカアンドアルファキヤドシステム四基更新
- 一九・二 東北経理専門学校コンピュータ実習用端末機一六台更新
- 二〇・三 東北女子大学家政学部児童学科、指定保育士養成施設として指定を受ける
- 二〇・七 柴田女子高等学校コンピュータ実習用端末機八三台更新
- 二一・三 東北女子大学校地として清原一丁目十四番地先他弘前市官有地購入
- 二一・五 東北女子短期大学アパレルキヤドシステム三基更新
- 二一・八 東北経理専門学校校務会計科を廃止する
- 二一・八 東北経理専門学校簿記科定員変更（一〇〇名から四〇名）
- 二一・一二 東北女子大学及び東北女子短期大学専攻科を廃止する

- 二二・一二 柴田幼稚園定員変更（入園定員四〇〇名から二五〇名）
  - 二二・三 東北女子短期大学生活科定員変更（入学定員一五〇名から一二〇名）
  - 二二・三 東北女子短期大学コンピュータ実習用端末機五二台更新
  - 二二・三 学校法人柴田学園理事長柴田誠造退任
  - 二二・四 理事今村吉彦、理事長に就任
  - 二二・七 東北女子大学新校舎竣工（鉄骨造5階建一三、〇五七㎡清原一丁目1の16）
  - 二二・一〇 東北女子大学新校舎落成式を挙行
  - 二四・二 東北女子大学が弘前市教育委員会と連携に関する協定を締結する
  - 二四・三 東北女子短期大学被服科を廃止する
  - 二四・七 東北栄養専門学校コンピュータ実習用端末機四一台更新
  - 二四・八 東北経理専門学校を廃止する
  - 二五・三 東北女子短期大学保育科が認定ベビーシッター資格取得指定校に指定される
  - 二五・三 東北女子短期大学長・東北栄養専門学校長・東北コンピュータ専門学校長河西達夫退任
  - 二五・四 理事長今村吉彦、東北女子短期大学長・東北栄養専門学校長・東北コンピュータ専門学校長に就任
  - 二五・四 柴田女子高等学校入学募集方法を一括募集に変更
- 一年次 普通科・家政科・情報科（二一〇名）

二 年次・三 年次に各コースを新設

普通科（二二〇名） 「みらい創造コース」 「総合進学コース」

家政科（六〇名） 「三冠王コース」 「調理食育コース」

情報科（三〇名） 「ITビジネスコース」

二五・五 創立九十周年記念式典挙行

二六・二 東北女子短期大学生活科がフードサイエンティスト資格認定機関として承認される

二六・九 東北女子大学家政学部家政学科を家政学部健康栄養学科に名称変更（平成27年度入

学生から適用）

二七・二 東北女子大学家政学部健康栄養学科が管理栄養士養成施設に指定される

二七・二 東北女子大学家政学部健康栄養学科が食品衛生管理者及び食品衛生監視員の養成施設として登録される

設として登録される

二七・二 東北女子大学家政学部健康栄養学科に栄養教諭一種免許課程設置認可

二七・九 柴田女子高等学校コンピュータ実習用端末機三十台更新

二七・一二 東北女子短期大学生活科定員変更（入学定員二二〇名から九〇名）

二八・九 東北女子短期大学新講義棟竣工（鉄筋コンクリート2階建九七七㎡上瓦ヶ町25番地）

二九・三 柴田女子高等学校家政科「調理食育コース」を「調理師コース」に変更

三〇・三 東北女子大学長小澤 熹退任

三〇・三 柴田女子高等学校長森下好宣退任

三〇・四 理事長今村吉彦、東北女子大学長に就任

- 三〇・四 柴田女子高等学校教頭中村光宏、柴田女子高等学校長に就任
- 三一・三 東北女子大学長・東北女子短期大学長・東北栄養専門学校長・東北コンピュータ専門学校長今村吉彦退任
- 三一・四 東北女子大学教授大島義晴、東北女子大学長に就任
- 三一・四 東北女子短期大学教授島内智秋、東北女子短期大学長に就任
- 三一・四 東北栄養専門学校教頭上野順子、東北栄養専門学校長に就任
- 三一・四 柴田女子高等学校、共学化に伴い柴田学園高等学校に校名変更
- 元・八 東北コンピュータ専門学校を廃止する
- 元・九 学校法人柴田学園理事長今村吉彦退任
- 元・九 理事加藤陽治、理事長に就任

ここに人ありき

# 柴田やす伝

第一刷 昭和六十一年三月十九日発行  
第二十二刷 令和二年一月一日発行

著者 船 水 清

発行 柴 田 学 園  
弘前市上瓦ヶ町二五

印刷 小 野 印 刷 所  
弘前市富田町五二







東北女子短期大学  
栄誉  
丁林





